

---

# 漆黒

zet

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒

### 【Nコード】

N4665X

### 【作者名】

zett

### 【あらすじ】

神の気まぐれで異世界に送られた平凡な高校生である柏木竜斗<sup>かしわきりゅうと</sup>。

第1章 異世界に送られ冒険者になったリュウト。しかし、そんな彼に早くも様々な問題に巻き込まれる。2章 ひよんな事から武闘大会に参加することになったリュウト。そんな中、怪しい影が暗躍し始める。

\*処女作なので駄文になるかも、ゆっくり更新していきたいと思えます。よろしくお願いします。

## プロローグ（前書き）

初心者なので、お手柔らかにお願いします

## プロローグ

それは唐突だった。

### キーンコーンカーンコーン

「はあ、やっと帰れる」

いつも通りに授業が終わり、伸びをしている俺こと柏木竜斗<sup>かしわぎりゅうと</sup>。普通のどこにでもいる高校1年だ。

「やっと終わったなあ」

そう話しかけてくるのは親友(?)の和也。まあ、所謂、腐れ縁というやつだ。

「じゃあ、俺は先に帰るから、部活頑張れよ」

そう言いつつ、俺はそいつを見捨てる。和也はサッカー部で何度も俺を勧誘してくる。

「えー、そりゃないぜ。というか、お前もサッカー部に入らないか？」

「こんな感じに。」

「だから俺は部活はもうやらないって言ってんじゃん。はあ、」

そう言って断る。それは聞いて和也は「なんでだよ・・・」とか言ってる。そう言ってる間に俺はダッシュして教室から逃げ出す。

和也がなんか騒いでいるがムシ。

「ただいまー」

俺はそう言って自分の部屋に入る。そしてそのままベットヘダイブ!

それが俺の覚えている最後のこっち(・・・)の部屋だった。

気が付いたら真っ白い所にいた。

「はいっ！？ここどこだよ？まずは現状確認だ。学校から帰って自分の部屋のベットにダイブしたと で、目を覚ましたら周りが真っ白だと・・・意味わかんネエー！！！」

「まあ落ちつけ、青年」

どっからかそんな声がしてきた。あわてて、周りを見ても誰もいない。

「見えないからこのまま話すぞー。まず、わしは全知全能の神様じや」

「・・・はあ、神様ねえ。神様が俺に何の用があるのかね？」

「うむ、お前を今から異世界に送る」

「・・・はあ？」

「ちよつと意味がわからないんだけど」

俺がそう言うと、

「もう決定事項だから変更できないぞ。安心しろ、送る世界の基本的なことは頭の中に入れてやるから、ガンバレー」

「ちよつ、待て。なんで俺なんだ？」

「まあ、わしの気分じゃな」

「・・・死ねよ！神様、最悪だ」

「神だから死ねんぞ」

「・・・しかも心読むな！！」

「じゃ、便利な能力を授けてやるから頑張れ」

そう言われて、俺はそれ以上しゃべることの叶わずに飛ばされた。

しかし、彼を送ることによる影響をまだ彼らは知らない。

それは全知全能の神でも・・・



## プロローグ（後書き）

駄文かもしれませんが、よろしく願いします!!  
誤字・脱字があれば、ご指摘お願いします。

## 第一話（前書き）

説明が多くなります。申し訳ありません。

## 第一話

目覚めると森でした。どうやら、あの神とかいうふざけた爺に送られたらしい。

「まあ、いいや。それよりここはどこだ？」

そう思っていると頭の中でいきなり”イスカル皇国 南の森”と出てきた。

「何だこれ！！」

思わず、俺は声に出してしまった。しばらく調べてると、あの神様がこの世界の基本的な情報を頭の中にぶち込んだらしい。

「入れるんだつたら、もっと丁寧にに入れてくれよ。頭が痛い」

数十分間後・・・

あれから、頭の中にある膨大な情報を整理すると

イスカルテと呼ばれるこの大陸には

今俺のいる森があるイスカル皇国

軍事力が大陸最大の帝国

獣人が住むクルト国

そして、エマという宗教の発祥の地とされるエマ神国があることが分かった。

100年前までは帝国がほかの国を侵略していたりして、はげしい戦争があつたらしいが今はどの国も不可侵条約を結んでいるらしい。だが、最近は帝国とエマ神国の間にきな臭い動きがあるようだ。ちなみに、この世界には獣人だけでなくエルフやダークエルフ等々色々な種族がいるらしい。もちろん、魔獣とよばれるものもいるらしい。魔法があり、代表的な属性が

『火』・・・明りや攻撃の基礎

『水』・・・癒しや補助的なもの

『風』・・・水と同じで補助的なものが多い。ただし、攻撃魔法もある

『雷』・・・一番破壊力が高い

『土』・・・防壁などの防御系

『光』・・・所謂、神聖魔法のようなもの

『闇』・・・よくわかっていない

と分かれている。このほかにクリエイターも創造や時空魔法があるらしい。また、魔法は下位、中位、上位、最上位とランクがあるらしい。ちなみに俺の魔法量は底なし。

「これはチートだよなあ」

思わず、ため息が付きたくなる。

そこで試しに火の下位魔法を使ってみた。ライターぐらいの火が出来ればいいかなあと思つて使つてみると拳よりも大きい火球が出来てしまつて大慌てでやめた。

「魔法使えないじゃん！」

そう言つたら、目の前に『初心者でも簡単！魔法制御の方法』と書かれた本が現れた。俺はしばらくその本を見ながら全属性を使つてみた。

「いやあー、やっぱり闇が一番いいな。」

俺がそう思つたのは闇属性の魔法は肉体強化から武具強化まで色

々あつたからだ。

もちろんかつこいいのもだけど。

創造魔法では黒いロングソードを二本と黒いシャツとズボン作った。なぜかというと神様からもらった知識の中に色々な道具と体術の説明があつたから。その中には二刀流のことがあり、同時に俺自身の憧れでもあつたからだ。

「当面の目標は、近くの街にいつてギルドのにでも登録しよう。しかし、メンドクサイ世界に来ちゃったなあ」

俺はそう言いながら森を出るために歩き出した。

## 第一話（後書き）

上手くつなげませんでした。

次回はギルド登録にしようと思います。

第二話（前書き）

駄作です

## 第二話

あれから、森を出て、ジグチとよばれる街に向かった。  
結果から言えば、街には無事に入れた。

「つたく、あの兵士は頭が固すぎるだろ」

入ったのが夜になる直前だったので怪しまれたのだった。

「何だ！？ 貴様、そんな恰好をして何をしている！！」

「いや、旅人だけ」

「だったら、ギルドカードか、身分を証明するものを見せろ！」

「俺、そんなの持っていないんですけど？」

「だったらこの街には入れやるわけにはいかない」

「そんなー」

などと俺と兵士が言い争っている後ろから別のやつが来た。

「何をしているんだ？」

そいつがそう言つとやつは

「こいつが身分を証明するものがないと言つて、」

そう言つと、そいつは

「そのくらいだったら早く町に入れてやれ。」「でも規則が・・・い  
いから、早くしろ」「わかった」

兵士は苦々しい顔しながら俺を入れた。

「悪かったな」

俺を入れるよう言つた兵士が俺に謝ってきた。

俺は少しびびくりしたが、

「いや、まさか身分証が必要とは思つてもいなかった。」

兵士は俺の発言に驚いていたが、すぐに笑った。

「そうか、だったらギルドに行つて登録をして来い。ちなみに俺の

名前はギル、ギル・ハーツだ。お前は？」

「俺は……」

俺は一瞬迷った。名前を教えていいのか。しかし

「……リュウトだ」

ギルは頷いて、

「リュウトか。よろしく」

「ああ、サンキュー、ギル」

そう言いあって、別れた。

これが今までの回想。で俺は今、冒険者ギルドに向かっている。

.....

ガチャツ……

冒険者ギルドの中に入ってみると、無茶苦茶マッチョでツインハンドソード大剣を背負っている人やダガーを磨きながら笑っている人……まあ、色々な人がいる。それを見つつ受付にいる若い男性に声を変える。

「すみません。登録したいんですけど……」

そう言うと、若い男性は俺のことを見定めるように見ながら

「そうか、じゃあこの用紙に必要な事項を書いてくれ」

俺はその用紙に必要な事項を書いていく。ん、なんでこの世界の文字が書けるのかってもちろん頭の中にぶち込まれてあるからだよ。

名前：リュウト

年齢：18

職業：剣士

属性：水・風

言語：大陸共通語・皇国語・帝国語・龍語・古代語

まあ、これでいいだろう。魔法はあまり目立ちたくないのも便利  
な水属性を選んでおいた。  
書き終わった用紙を男性に渡す。

「へえ、お前二属性使えるのか。しかも水属性か。それで剣士だと  
便利だな」

「ええ、でもさわり程度ですよ」

「それでも、便利には違いないだろ」

そう言いながら、笑った

「そうですね」

俺は苦笑しながら頷いた。

「しばらく待ってる。」

そう言うと男性は、奥に引っ込んでしまった。

しばらくして（時間的には5分程度）、戻ってきた男性の手には  
黄色いカードが握られていた。それを俺に渡しながら

「これがギルドカードだ。そして俺はこのギルドのマスターだ。」

まっ、気軽にマスターとでも呼べばいいさ」

彼が笑いながら俺に言うが俺は驚いた。

「ギルドマスターだったんですか？そんなに若いので驚きました。」

「よく言われるよ」

マスターは苦笑しながら言った

「それじゃ、ギルドの説明をするが、聞くか？」

俺は頷いたのを見て、マスターは説明を始める。

「まず、ランクについてだがランクはF〜SSまである。原則として自分のランクの二つ上のランクの依頼まで受けられる。例えば、お前さんの今のランクはFだ。つまり、Dのランクの依頼までは受けられるというわけだ。まあ、一概には分けられないものもあるんだがな。依頼は色々あるから気よ付けるよ。」

俺はそれに顔を引き締めながら頷く。

「次にお前に渡したギルドカードの説明だ。ギルドカードは最初は黄色だ。ランクが上がるにつれ、緑、赤、紫、青、藍、黒となる。Sになると黒になると同時にその人物の情報をギルドの本部が直接管理することになる。そして、最高ランクのSSになるとギルドカードの縁が金縁になる。理解したか？」

「はい、それで質問なんですけど、Sランク以上の人は何人ぐらいいるんですか？」

「そうだな、氷姫に炎帝、ほかに鋼鉄もいるし……」

そう言ってマスターは顔をしかめながら考え始めた。

「Sランクは二十人はいない。SSランクは十人もいないだろ。」

「案外、少ないんですね。」

「そんなにぼんぼん出ても困るんだが、な」

「まあ、そうですね。」

そう言って俺たちは笑いあった。

「ギルドカードについての説明は終わったとして、次はこのギルドの説明だ。」

このギルドには受付のほかに酒場がある。酒場は、情報が集まる場所でもあるからな上手く利用しろ。

今日はもう遅いし、依頼を受けるのは明日にしろ。ちなみに宿は

『川のせせらぎ』という宿を使え。あそこは冒険者に評判がいい。じゃあまた、明日な。」

「ええ、わかりました。おやすみなさい」

そう言って俺はギルドから出て、『川のせせらぎ』という宿に向かった。

- - -

「いらっしやい。一人かい？」

宿に入ると、受付にいるのは恰幅のいい中年のおばさんだった。

「宿をとりたいたけど」

「そうかい、じゃ1週間で銀貨一枚と銅貨三十枚だよ」

「じゃあ、二週間で」

と俺はそう言って懐から銀貨二枚と銅貨六十枚差し出した。そして、おばさんから部屋の鍵を貰い、部屋に入り、ベットに潜り込んだ。

そんなこんなで俺のギルド登録の一日は終わった。

ちなみにこの世界のお金の単位は

銅貨百枚で銀貨一枚

銀貨十枚で金貨一枚

金貨五十枚で白金貨一枚となっている。

## 第二話（後書き）

リュウトがお金を持っていたのは起きたら金貨一枚、銀貨十枚、銅貨百枚が置いてあったから盗んだものではありません

文才がほしい……。

誤字・脱字の報告お願いします。

## 第三話（前書き）

はじめての視点を使ってみました。

## 第三話

-----sideリユウト

翌日、俺は外に出て二刀流の型と体術の鍛錬をしていた。

初めはぎこちなかったが、三十分もするうちに滑らかに体を動かすことが出来た。

おかげで分かったことがある。

それは俺自身の身体能力が著しく上がっていることと何の訓練をしていないのに周囲の気配が分かり、自分の気配を殺すこともできるというわけだ。

小一時間やった後に汗を魔法で流し、宿に戻り朝食を食べ、宿を出た。

宿を出た後にやって来たのは、武具屋だ。

ちなみに、今のリユウトの恰好は背中に二刀を交差させるように装備し、上下は黒のスボンとシャツに黒のロングコート。すべて魔法で強化してあるものだ。そして、右手の指にはあふれ出る魔力を抑える為の指輪がつけられている。

暇つぶしに見に来たのである。

「よお、兄ちゃん」

中にいたのはドワーフのおっさんだ。

「おっさん、なんかいい装備ある？」

「ああ、あんた冒険者か？」

「ああ、昨日なつたばかりだ」

「へえ、じゃあ祝いに内にある装備を一つだけ無料タダやるよ」

「サンキュー」

そう言つてリュウトは店の中のを物色し始めた。店の中には防具から武器、アクセサリーまである。

その中にひときわ、目を引くものがあった。それは一見、普通の腕輪なのだが魔力が秘められているのが分かる。

「おっさん、この腕輪つてどんな効果があるんだ？」

おっさんは俺が持つてる腕輪を見ながら

「ああ、それは効果がよくわかんねえんだ。ま、欲しいならくれてやる。噂じゃ、太古の時代に生きていた魔女が封印されてるみてえだが、はつきりとはわからん。」

「ふうん」

魔女が封印された腕輪が、面白そうだな

リュウトはそう考えると、それをポケットに入れた。そしてスロ  
ーイングダガーを4、5本買うと今度はギルドに向かった。  
もちろん、依頼を受ける為である。

- - -

今、リュウトは南の森にいる。

リュウトはギルドでゴブリンの討伐依頼を引き受け、森にいるのだが……

現状      リュウトVSゴブリン100匹以上

「なんでこんなことになるかな？」

リュウトは苦笑する。

それにはちゃんと理由があるのだが、森にゴブリンのコロニー（巣）があるとは知るはずがない。

そんなことを思っていると叫びながら一斉にゴブリン達が襲ってきた。

「\*+?!&%\$#@=¥」

「\*+?<|—||!”#\$%‘\*?’」

「チツ！殺すのは好きじゃないんだけど、仕方ない」

そう言いながら、リュウトは襲ってくるゴブリンを二刀や体術を使い敵の攻撃をかわし、いなし、時に剣や魔法を使い、攻撃し向かってくる敵を倒し続ける。

ザシュツ！！  
バキツ！  
グチャツ！！

しばしの間、骨や肉が織りなす音に森は包まれた。

「しっかし、なんでこんなにいるのかな？まあ、自分の実力を測れたんだからいいんだけどな」

そう言ってリュウトは剣を振り、血糊を飛ばす。そして、チルを取り出し、討伐達成部位を回収する。

チルというのは、モンスターから討伐達成部位を回収する球状の物体のことだ。“集え”と言えば勝手に回収してくれる。

生き物を殺すってのはこういう感触か。いくら生きるためとはいえ楽しむことはできないな。

それに殺しても罪悪感や浮かんてこないんだよな。多分、神がこっちに送る時に何かしたんだろ。

リュウトはそう思いながら、自分の状態を確認する。小さな擦り傷や切り傷が多くは無いがあある。それは水魔法で治し、血糊を流し、火魔法で服を乾かす。そして、やれやれと思いつながら、ギルドに帰るリュウトであった。

-----sideマスター

それにしても、久しぶりに面白い新米が入ってきたな。

リュウトがゴブリンの大軍と戦っているとき、ギルドマスターは部屋の椅子に体重を預けながら、考えてきた。

新米は基本的に将来、有能なものになるかも知れないので、ある程度の実力がつくまで、大切にするのが、

「なーんか、あいつ有るんだよなあ」

あいつ、とはもちろんリュウトのことである。

リュウトが常人とは違うことに気が付いている。だてにギルドマスターをやっているわけではないわけである。

「まあ、おいおいわかってくるだろうし、今は様子見か。さて、今日も仕事をしないとな」

そう言って、机の上にある大量の書類を片付け始めるのであった。

-----sideリュウト

俺、悪くないよね？

いきなりで悪い。でもこれは仕方ないんだ。だって信じてくれな

いんだもん。俺がゴブリンを100匹以上狩ってきたこと。

よくわかるよ。だって、昨日冒険者になったばかりの人がやれるわけないよね。

というわけで、今俺は受付にいるきれいなお姉さんに必死に説明もとい説得中。そんな風に騒いでいたら、

「おい、どうした？」

奥から、マスターが出てきた。

あれ、なんかデジャブじゃね？前にも似たことがあったよ な？

「いえ、この人がゴブリンを100匹以上倒したなんて言ってるんです。冒険者に成り立ての人が倒せるわけないのに・・・」

「それは本当か！」

マスターが驚いた表情で、俺を見てきた。

「・・・えええ、本当ですよ。」

「あり得ません!!」

受付のお姉さんが俺の言葉を否定してくる。しかも、睨みながら。ちよつと怖い。

「だが、チルの中に証拠は入っているんだろう？」

「はい。でも」だったら、認めるしかないだろう「!.....」

はい

「あと、リユウト。この後俺の部屋に來い！！いいな？」

「えっ！！わ、分かった。」

というわけで、認めてはもらえたんだけど、なぜかマスターに呼び出される俺。

はっきりに言って、面倒クセー

### 第三話（後書き）

はじめての戦闘シーンを書いてみました・・・微妙ですね。  
改善点があったら、教えてください。

次はマスターの部屋で尋問です。では、次回

10/13 指輪を腕輪にしました。

## 第四話（前書き）

マスターの部屋で尋問タイム。さあ、どうなるのでしょうか

評価ポイントがだんだん上がってきました。ありがとうございます。

## 第四話

-----sideリユウト

受付での一悶着の後、俺はマスターの部屋にギルドの職員に案内された。

一体、何を聞かれるのか内心、メツチャ怖い。

そう考えていると、いつの間にかギルドマスターの部屋に着いた。

コン、コン

「失礼します。リユウト様をお連れいたしました」

案内の人がそう言う。すると、

「ああ、入ってくれ」

マスターの声やし、扉が開いた。

そこには厳しい顔をしたマスターが座っていた。

-----sideマスター

「失礼します。リユウト様をお連れいたしました」

そう言うつギルドの職員の声が扉越しに聞こえた。

「ああ、入ってくれ」

俺がそう言うつと、扉が開かれ、顔をしかめたやつがいた。

「では、失礼します」

そう言うつて職員は下がった。すると、途端に部屋を沈黙が支配する。どちらか一言も話さない。

部屋にいるのは二人

片やギルドマスター

片や新米の冒険者のくせにゴブリンを100匹以上殺してくるイ  
ミフメイの若者

俺が呼んでおいて話さないわけがないよな

ギルドマスターはそんな事を考え、苦笑した。そして、

「本当にあれはお前がやったんだな？」

そう切り出した。

.....sideリユウト

はつきり言っただけ怖い。マスターは話さないし、ギルドの人は部屋を出て行っちゃうし、もう泣きそう。

リュウトの精神はギリギリ

そんな時、マスターがいきなり言ってきた。

「本当にあれはお前がやったんだな？」

「はっ、ハイ!!!」

いきなり話しかけられて、嘔んでしまった。

それを見て、マスターはげらげら笑い出した。

「はっはっはっ、その様子だと本当にお前のような。いやー、面白いわお前

で、実際どんな状況だったんだ？」

そう言われ、森の中でゴブリンの大軍に包囲されていた、と話した。

「よく生きてたな」

マスターは、俺を目を細めて見てくる。

「じゃ、お前ランクDにランクアップね」

「なっ、なんで!!!？」

はつきり言っただけびっくりした。なんでたかがゴブリンを倒した程度でEランクを飛ばして、Dランクに行けるのかさっぱり分からない

いからだ。

「いや、普通に考えてみるよ。ゴブリンの大軍に囲まれて、生きて帰ってくる奴なんてほんの一握りのさらに一握りだぞ！しかも、ゴブリンの大軍なんてひとつの軍を組織しながら掃討するもんなんだ。」

「まあ、そりゃ確かに」

言われてみれば、確かにあの規模だと、冒険者のひとつやふたつのパーティーでは壊滅してしまうだろう。

「というわけで、お前のランクはFからDに昇格。おめでとう」

そんな事を言われ、急に部屋の外に出され気が付いたら宿の部屋にいた。

初めに感じたのが、茫然、次は何とも言えない感情。

ここは素直に喜ぶべきなのかその時は本気で迷ってしまった。結局、考えるのも面倒になり、ベットに横になり目を閉じた。

目を閉じてても眠れてないことに気づき、目を開けてみた。

・・・・・・・・・・真っ白な空間がありました

「えっどこどこ？」

【ここはあなたの精神世界といたところかな？】

そんな声が聞こえ、いつの間にか目の前に少女がいた。それも美少女。

「えーと、君は誰？」

【わたしは、腕輪の中に太古の魔女の残留思念といったところかな。】

「残留思念？つまり、腕輪の精霊ってこと？」

【まっ、今のところそれでいいわ。よろしく、リュウト】

「あ、ああ、よろしく？それで、なんで出てきたんだ？」

俺がそう言つとそいつは少し考えるような顔をしながら、

【ん〜、あなたの魔力が強くて、眠っていたわたしの一部が起きたんだと思つわ】

と言ってきた。

「んなことがあるのか。」

【じゃ、顔合わせはこれで終了ね。今度までにわたしの名前、考え

といて。じゃあね〜】

「ちよっ、待て」

そう言っつて突然消えたと思っつたら、目の前が真っ暗になった。そして気が付いたら、朝だった。

#### 第四話（後書き）

ヒロイン（？）登場かな？

どうしようか悩んでいます。主にヒロイン関係  
どなたかアドバイスください。お願いします。  
誤字・脱字のほうもよろしくお願いします

## 第五話（前書き）

だいぶ、文章が長くなってしまいました。  
申し訳ありません。

PVが3、000オーバー。これからもよろしくお願いします。

## 第五話

おはようございます、朝ですよ皆さん。俺の頭がもう事象を理解しようとしてくれません。

だって、【名前考えといてね！】ですよ！！

俺はネーミングセンス無いんだよ。他を当たってくれと言いたくなる。

でも、うだうだしても始まん！！

そう自分に言い聞かせ、朝の鍛錬に出かける。

鍛錬が終わった後は道具屋に行き、回復ポーションや解毒ポーションなどの消耗品などの冒険に必要な物の用意をする。準備が出来たところで、ギルドに依頼を受けに行く。

そんな毎日が二週間続いた。

-----sideリユウト

ある日、俺は薬草採取の依頼を受け、森で探していた。夕方になりかけてきた頃に、やっと集まった。

「なんで、一枚だけ入口の近くにあるんだよ」

そう言って森から出ようとしたとき、

「きゃああああああああああ!!」

・・・なんか叫び声が聞こえたよ。これは行ったら、死亡フラグ立つよなあ。けど、死んだら困るし。はあく、行きますか

そう思い、叫び声が聞こえたほうに走るリュウト

-----side???

なんで?なんでこうなるの?私はただオーグを狩る依頼を受けただけなのに!

そう思い、前にいる巨体を見ると、腕を挙げ、振り下ろしてくる。

「あ、ああ、ああ・・・」

ここで、私は死ぬのかな

もはや、冷静な思考もできない彼女は逃げるという選択も取れずにそんな事を考えてしまう。

そんな時、黒い何かが巨体に横からぶつかって来た。すると、巨体は吹っ飛んでいった。

そして、ぶつかって来た何かが叫んできた。

「早く、ここから逃げろ!!」

-. -. -. sideリユウト

叫び声が聞こえた方向に走ってみると、デカイ何か小さい人影に立ちはだかっているのが見えた。

しかし、その人影は逃げようとせずただ、震えているように見えた。よく見ると、それが少女というのが分かった。

「チイツー!!」

俺は舌打ちをして、体当たりを敢行。すると、デカブツは奥に吹っ飛んで行った。

いまだに震えている少女に

「早く、ここから逃げる!!」

そう叫ぶと

「あ、あなたは・・・?」

「俺が押さえる!その隙に逃げる!!」

「でも、「いいから、早く!」・・・わかった。ギルドのみんなを呼んでくるから、死なないでね!!」

そういつて彼女は出口に向かって走り始めた。

「死ぬな、か」

そう呟きながら立ち上がったデカブツのほうを向き、  
『アナライズ解析』を

発動

結果がすぐに出てくる

名称：強化オーグ

体長：3メートル

ランク：B相当

武器：巨木

耐性：物理・魔法ともに8

「強化オーグだと！？ばかな！！？」

普通、魔物に亜種はいても「強化」とか言うものは存在しないはずなのだ。

また、オーグは普通でかいやつでも2メートルは超えないのである。

つまり、どっかの誰かさんがこのバカでかいオーグを作ったということか！

まあ、いい。どちらにしろ俺がやるのはこいつを倒すことだ。

そう思い右手の指から魔力制御の指輪をはずし、背中の一刀を抜刀する。

体には『フィジカルバースト肉体強化』を、剣には闇魔法でコーティングをする。そ

して、こちらに完全に気づく前に切りかかる。だが、

ガキツッ!!

「なっ！硬い!!」

思ったよりも皮膚が硬く、剣が通らない。それどころか、逆に拳による攻撃を食らう羽目である。

二刀を交差し、ガード姿勢をとり、相手の攻撃に備える。

重ッ!!

受けた瞬間、超弩級の重さが押し掛かる。瞬間的に力を流し、逃げる。逃がした拳が地面に当たる。

その瞬間、

ドカアアアッ！バキキキイイツ！

そんな音をたて、木を消し飛ばしながら地面に5メートル大のクレーターをつくる。

「おいおい、マジかよ。洒落にならないぞ、これは」

その光景を見て、背中から冷や汗が出る。

「ちっ、仕方がない。」

そう言いつつ、二刀を構え

二刀流 動 式の型『舞』

『舞』は二刀を複数の属性で強化し、相手の周りを高速で動きながら切りつける技。云わば、ヒット&アウェイだ。

リュウトはオーグの周りにある木を飛び移り、蹴りながら、二刀で切り付けていく。

漆黒の斬撃がオーグに吸い込まれ、体のあちこちから血が飛ぶ。

「グオオオオオオオ・・・」

そう叫びながらオーグが手に持っている巨木を無茶苦茶に振り回すが、全くリュウトには当たらない。

そして『舞』が終わり、オーグの背後に立ち、第二波を繰り出そうとしたリュウトを巨木が捉える。

「ガハッ！！」

咄嗟に二刀を交差することでガードしたリュウトだが、威力を減らすことがまったくできずに吹っ飛ばされていく。

「ゲハッ！！ゴホッ、ゴホッ！」

何本もの木にぶつかり、地面に叩きつけられると口から血が2、3滴地面へ垂れて行く。

まずい。直撃でもないのにこの威力は非っ常にまずい。絶対に直撃は避けなければ。

そう考え、こちらに向かってくる巨大な物に向かって風魔法を詠

唱する。

「風よ、我が敵を切り裂け『ウインドカッター』」

だが、『ウインドカッター』は相手の皮膚に少し傷を付ける程度に終わった。

「ゲツ、マジかよ」

悪態をつき、前から考えてあったオリジナル魔法を使ってみた。

「風よ塊となり、我が障害を叩き潰せ『ダウンバースト』」

この魔法は相手ごと空気の塊で押しつぶそうとしているのである。これにはさすがのオーグもつぶれはしないが、膝を地面につき動きが止まる。

すかさず、リュウトは魔力を供給しながら足を大きく開きながら腰を落とし、右の剣を上段に、左の剣を下段に構え、技を繰り出す。

二刀流 激動 終の型『天地震撼』

地面を蹴り、上と下から漆黒の斬撃を放ち、次に左右から放つ。さらに上、下、右、左、斜めなど数多の方向から斬撃を放つ。

## 第五話（後書き）

『アナライズ解析』と『ダウンバースト』はリュウトのオリジナル魔法です。  
『アナライズ』は相手の特徴から弱点までを把握することが出来ます。

『ダウンバースト』は相手とその周囲に対して、空気を塊として落とし、重力のように押しつぶそうとする魔法です。

## 第六話

-----sideマスター

リュウトが強化オーグと戦っているとき、ギルドは慌ただしくしていた。

理由はもちろんリュウトが助けた少女　　キナがギルドに助けを呼びに行ったからである。

事情を聞いたギルドマスターは手の空いている冒険者たちを招集した。リュウトを助けるための部隊を決める為である。

「まず、依頼を受けている奴以外はここに残ってくれ」

ギルドマスターがそう言うと、半数ぐらいの冒険者たちが残った。

「次は、Bランク以上の冒険者がチームを組んでいるもの。そして、治療師は残ってくれ。」

そうギルドマスターが言うと、チーム全員がBランクのチーム『<sup>くれない</sup>紅』とヒーラー数人が残った。

「そろそろ、理由を話してくれてもいいんじゃないか？マスター」

そう言ってきたのは、『紅』のチームリーダーであるハギ

「ああ、そうだな。」

「さっき、キナがギルドに慌ただしく入って来たのは知っているな

「？」

そう俺が言うと、何人かの冒険者が首を縦に振る。

「それとこれがどう関係あるんだ？」

「どうやら、とてつもなく強いモンスターがいて全く歯が立たなかつたらしい。そして死に掛かっているところをリュウトに助けられたいらしい」

俺の言葉で冒険者たちが騒ぎ出す。

「それって、ソロでゴブリン100匹以上を倒したって言われてる新人か？」

ハギでさえも聞いてくる。

「ああ。そこで、だ。そいつを助けに行ってもらいたい。頼む」

「わかったよ。助けに行けばいいんだろ？お安い御用だ、そうだからお前ら？」

「「「おう！」「」「」

そう言って、ハギ率いる救助隊はギルドを出て、森に向かって行った。

「間に合ってくれよ！」

思わず、そう言っていたことに彼は気づかない。

.....sideリュウト

「はあ、はあ、・・・クソ！」

今、リュウトは木の陰に隠れ、呼吸を整えている。

体には無数の傷がある。そのなかでも、右腕を縦に走る長い傷が一番ダメージを与えているように見える。その傷は、『天地震撼』を使っているときに不意に来た相手の爪に気づかず、受けてしまった傷だ。

この傷で右腕は剣は持てるものの、振ることはできない状態だ。

チツ、慢心してたな。楽に倒せると思っていたが奴さんは簡単には勝たせてくれないみたいだ。

こちらもう体力が少ないし、この状態ではこれ以上魔力を使うのは危険だしな

どうする？こうなれば、賭けるしかないか

そう考え、木の陰から出てオーグの前に姿をあらわす。

「グルルウルルルル」・・・

「そう怒るなよ。もう終わらしてやるよ」

そう言うと右の剣はだらり、と下げ、左の剣を正眼に構えありつただけの魔力を注ぎ込む。そして、一気にダッシュをする。

「うおおおおおおおー！ー！」

「がああああああああ!!」

そう叫びながら、交差するふたつの影  
そして、片方は膝をつき、片方は肩から腰にかけ血を噴き出しな  
がら、前のめりに倒れる。

「つら．．過ぎる．．だろ？」

息絶え絶えに言うのは膝から力が抜けたリュウトである。魔力を  
限界ギリギリまで使ったので視界が回り、気持ちが悪い。

そんな風になり、仰向けで倒れているとガチャ、ガチャという音  
と共にどなり声が聞こえてきた。

「おい!!しつかりしろ。チツ、ヒーラー、こっちだ。傷がヒデエ  
!!」

そんな声がかけられるなか、徐々に暗くなる意識の中でこう思っ  
た。

おせえよ、もっと．．は．．やく．．．に來い．．．よ

それを最後にリュウトの意識は黒く塗り潰された。

．．．．side???

帝国某地の一室

黒装束を身に着けた人影が背を向けている貴族と思われる男に片  
膝をついている。

「申し上げます!!」

先ほど、イスカル皇国に送り込んでいた強化兵がやられたようです」

「何！それはまことか？」

「は！！」

数時間前より通信が取れなくなっておりますので……」

「そうか……一体何者が？」

「それにつきましては、わかり次第ご連絡を！」

「うむ、下がってよいぞ」

男がそういうと、黒い影となり音もなく消えた。

「ふむ、一体誰がしたのか」

男はそう呟きながら、視線を虚空に漂わせていた。

この時、すでに大陸は激動の時代に入りつつあった。しかし、まだ誰も知らない。そう、だれも……

## 第六話（後書き）

次は精神世界から始まります。

その後はヒロイン登場といきたいです。

第七話（前書き）

しばらくぶりの精神世界です

## 第七話

-----sideリユウト

目が覚めたら、見知らぬ天井でした、なんてことは無く、よく知ってる真っ白な空間と二週間ぶりに会う美少女がいた。

【久しぶり。二週間ぶりぐらいかしら？】

少女の鈴のような声が言う。

「ああ、そのぐらいだな。ところで、今度は何の用だ？」

【名前を考えてくるっていう約束を忘れたの？】

「いや、でもあれはおま【でも、約束したでしょ？】・・・はあ、わかったよ。」

【そう、で私の名前は？】

「ルナ」

【『ルナ』いい響きね】

ルナがそう言うと、急に体が大きくなった。その容姿はだいたい十六歳ぐらいだ。背は160センチぐらいだろうか？胸はDとFのゲフンゲフン、まあそれなりにとっておこう。

それに驚いた俺は、

「なんで、いきなり大きくなったんだ？」

【そりゃ、名前を貰ったからじゃない】

「そういうものなのか？」

【そういうものなの。ところで、あなたのいた世界では『ルナ』という名前はどいう意味があるのかしら？】

「なっ！！な、なんでその事を!?!」

俺は驚きながらも聞き返す。

【だってここはあなたの精神世界よ。自分の主の事情ぐらい知っていてもおかしくないわ】

「・・・さいですか」

そう言われちゃ納得するしかない

【で?】

「ああ、『ルナ』っていうのは月を表してたと【自信ないんだ】・・・悪い」

うる覚えの知識なので責められても仕方がない。

【じゃ、こんどからは念話で。これからよろしくね、リュウト】  
「ああ、よろしくルナ」

俺たちがそう言つと、急に視界にもやががかかったように周囲が白くなる。そして、そのまま何も見えなくなる。

目を開けると、そこは知らない天井だった。

「うっ、うっは?」

体を起して周囲を見ると、病室のようだった。  
しばらく、体を起こしているとギルドの職員と思われる人が部屋  
に入ってきて、

「あら、やっと起きたのね。心配してたのよみんな」

「ああ、すいません。ところで、魔法制御の指輪ってありますか？」

「指輪？いいえ、なかったわよ。というか、君の体から魔力はこぼ  
れてないわよ」

俺の問いにそう答え、彼女はそう指摘する。

じゃ、もういいか

そう思い、次の質問をする。

「ところで、今ってあれからどのくらい経っているんですか？」

「あれから3日は立っているわよ。ちょっと待ってね。今、マスタ  
ーを呼んでくるから」

そう言つと、彼女は部屋を出て行った。

「3日かよ」

思ったより長い時間眠っていたことが分かり、啞然とするリュウト  
そのまま茫然としてると、部屋の扉がいきなり開きマスターが入  
って来た。

「おう、生きてたか」

-----sideマスター

リュウトがギルドの病室に寝かせれた後、マスターはすぐにギルド本部に連絡を入れた。

本部はすぐにSSランカーの調査員を派遣してくれるとの事で、一安心はできた。

あれから3日、

「そろそろ、着く頃か？」

そんな事を言いながら仕事をこなしていると、職員の一人が入ってきてリュウトが目覚めたことを伝えてきた。

「わかった、すぐ行く」

そう言っただけは今持っていた書類を片付けると、あいつが寝ている病室に行った。

「おう、生きてたか」

そんな言葉と共に部屋に入ると、唾然としている奴の顔が見えた。

「はっはっはっ、なんだお前、その顔」

俺は面白くて、思わず笑ってしまった。

それを聞き、奴は

「いや、あれから3日もたっているんだなあと思ってさ」

「ああ、なるほどな」

なつとく、なつとく。

ま、起きたら3日たっていますと言われたよつなものだからな。

そう思い、意識を切り替える。

「ところで、あの件に対して本部が腕利きの調査員を派遣してくれることになってな。もうまもなく来ると思う。そのことを知らせに・  
・いや、忠告しにきた。」

マスターの言葉を受けて、リュウトの顔が若干こわばる。

「一体なんの？」

「お前は当事者だろう」

「まあ、そうだな」

「そこで色々聞かれると思うから、覚悟しておけ。いいな？」

「ああ、分かった」

リュウトが分かったことを確認し、席を立とうとしたとき

「マスター、ここにいたんですね」

凜とした声が俺の耳に聞こえてきた。

## 第七話（後書き）

誤字・脱字ありましたらお願いします。  
感想もぜひ

第八話（前書き）

今回長めかも

## 第八話

----- sideriユウト

「マスター、探しましたよ」

凜とした声が聞こえ、俺は部屋の入り口に立っている人を見て驚いた。

入口にいたのは、女性だったからだ。

淡い水色のセミロングの髪に肌は色白、年は俺と同じぐらいだと見える。

俺が茫然としながら見ていると

「おいおい、お前が派遣されたのかよ」

「グランドマスターから研修ついで行って来いと言われたからね。

で、そっちの人が報告にあった？」

「ああ、おい自己紹介しろ」

俺は我に返って、

「Dランカーのリユウトだ。よろしく」

「タメ口でいいわよ。SSランカーのエリサ・ハーバーよ、よろしくリユウト」

「はっ!?!SSランカー!?!...悪いけど、エリサって今何歳？」

「女性に年齢を聞くの？」

「あっ!?!ごめん」

「別にいいわよ」

俺がSSランカーはこんなに若い人がなれるのかと思っていると

マスターが説明してくれた。

「そいつは史上最年少でSSランカーになったんだよ」

「史上最年少ですか・・すげえな」

「ま、まあ、そんなことより報告にあつた魔物はどこに？」

リュウトの言葉にエリサは照れたようになり、話を変えた。

「ああ、こつちだ。付いてきてくれ。あつ！リュウトも来い、確認したいことがある」

マスターはそう言う俺たちを先導して地下室へと入っていく。地下室は様々なモンスターの爪やら皮やらが保管されてあつた。

「ギルドの地下にこんな空間があるんだ」

「わたしも初めて知つたわよ」

「リュウトはともかく、エリサは最近SSランカーになつたばかりだしな」

「そうなのか？」

「ええ、二か月前になつたばかりよ。」

SSランカーになつたばかりの人たちは研修をしばらく受けるの

「じゃあ、エリサはまだ研修中つて事？」

「ええ。まっ、もうすぐ終わるけどね」

そんな会話をしながら、マスターの後に付いていくと目の前に重厚な扉があるのに気がついた。

マスターはその扉の前に立ち、手のひらを扉に押しつける。

俺たちはマスターの行動に首を傾げた。

10秒ぐらいすると、扉に光の脈(?)みたいなのが現われ扉が左

右に開く。

「今のは・・・一体？」

「今のは歴代のここのギルドマスターの魔力に反応して開くものだ」  
「へえ、すごいわね」

感心しながら部屋の中に入ると中には俺が倒した強化オーガが大の字で置かれていた。そして、その近くにはローブに身を包んだ人物がいた。

「で、何かわかったか？」

「まあ、一応」

その人物にマスターが尋ねると、その人物は報告を始めた。

「まず、この魔物の素体はオーガです。」

ですが、『強制成長』や『狂化』などの禁術がいくつか使われていることが分かりました。」

「何！！それは本当か！？」

「ええ。そのため表皮がとても硬く、ミスリルの剣でも傷をつけるだけに収まります。」

魔法の種類で特定できると思っていたのですが、特定できませんでした、申し訳ございません」

「・・・いや、よくやってくれた、ありがとう」

マスターが礼を言うと、その人は頭を一回下げてから部屋を静かに去った。

「で、これからどうするの？」

「あ、ああ、そうだな」

そう言えばリュウト、お前はこれを剣でこの硬い表皮を切ったんだよな？」

「え？まあ、そうだけど、「え！！剣で！？」・・・ああだけど、それがなに？」

エリサが驚いたので俺は思わずそう返してしまった。

「だって、ミスリルの剣でも傷しかつかないんだよ！！  
リュウトの剣はどれだけ質がいいの？」

俺はそこで自分の失言に気づいた。

「わるい、わるい。俺はその時、風魔法を剣に纏わせてたんだよ」  
「ミスリルで切れなかったなら、風魔法を纏わせた程度じゃ切れな  
いと思うんだけどなあ？」  
「うっ」

とつさに言い訳をするが逆にエリサとマスターにじと目で見られてしまった。

「君って実はとっても強いんじゃない？」  
「いや、そんなことないよ。俺はただのDランカーだし」  
「いいよ、別に。それも戦えば分ることだしね」  
「はっ！？」

俺はエリサが言ったことに耳を疑った。

「エリサ、お前は俺にお前と戦えっていうのか？」

「ええ、話して分からないなら実力行使よ」

「横暴だ・・・」

「横暴で結構。マスター、決闘の許可ください」  
「ったく、お前らだけで勝手に話を進めるな！こっちの身にもな  
つてくれ。頭が痛い」

そう言いながらもマスターは許可を出してしまつた。

《俺はどうしたらいいんだ？》

【素直に戦うしかないんじゃないの？】

《はあ、気が重い》

【がんばってね〜】

ったく、他人事だと思いやがって

ルナと話している間にも着々と決闘のルールなどを決めているエ  
リサとマスター。

どうやら、リュウトは逃げられないらしい

## 第八話（後書き）

うーん、描写がうまく書けない。アドバイス求む!!

次回は決闘になる予定、こっご期待  
指摘・誤字・脱字がありましたらよろしく願います

## 第九話（前書き）

すみません、間が開いてしまいました。

## 第九話

-. -. -. side エリサ

「じゃ、あとでね」

私はそんなことを言いながら、武器を取ってくるために二人からいったん離れる。

マスターはニヤニヤしながら、リュウトはシヨックなのか、ズドーンという音が聞こえてくるような顔をしていた。

「ふふ、うふふふ・・・」

思わず笑ってしまうぐらいリュウトと手合わせするのは楽しみでならない。

病室でマスターと話している彼を初めて見たときは、どこにでもいる青年かな、と思っていたのだが、リュウトが強化されたモンスターを見たときは嘘だと思った。

なぜなら、リュウトが倒したとされるモンスターはSSランカーなら楽に倒せるだろう。しかし、Sランカーでも倒すのは不可能とは言わないが、相当苦勞するだろ。なのにDランカーのリュウトは本人もぼろぼろと聞いたが、倒した。そう、倒したのだ。

エリサは話を聞けば聞くほど、実は報告より強いのではないかと思った。そこで決闘をし、エリサ自身で確かめようと思ったのだ。

そんなことを思いながら、目的の場所に向かっていると

「こんなところにいたんですか、お姉様？」

とツインテールの少女が話しかけてきた。

彼女の名前はミシエル・クリサント、エリサについていくことを志願したSランカーの冒険者である。

ちなみに、ついていくこと理由は『お姉様の貞操を守るため』らしい……。

「調査は終わりましたか、お姉様？」

「うん、一応終わったわよ」

「一応？まだ、やることって残ってありましたか？」

「うーん、やることと言っよりやりたいことと言っべきなのかな？この場合は」

そう言っって、微笑むエリサ。

「どんな内容ですか？」

「決闘よ！」

「決闘！？さては、このギルドの冒険者がお姉様を襲おうとして・  
・許せません！！今すぐ殺してきます！！」

「……いい、いいの。私からお願いしたことだから」

今すぐにも、リュウトを見つけて殺しかねない勢いだったのであわてて、止めた。

余談だがこの時、リュウトの背筋が寒くなったのは本人以外誰も知らない

閑話休題。

「お姉様から！？」

エリサがそう言っくと、彼女の動きは急にピタツと止まる。

基本的に彼女はエリサの言うことは何でも聞いてくれる。しかし、

慕ってくれるのはいいんだけどねえ、突拍子な行動に出るのだけ早めてほしいなあ・・・

そう心の中で、ため息を漏らす。

「何ですか？気になる冒険者でもいたのですか？」

「うん、気になると言ったら気になるかな？「それはどのような人で!!」 え、えっと、二刀流を使う男の人!!」

ミシエルが思いつ切りがついて来るので、思わず引きながらも答えてしまった。

「男、ですか・・・うふふ・・・殺して差し上げますわ、その男・・・うふふふふふふ・・・」

あ、あれ？なんでミシエルの後ろに般若が見えるのかな？

「ストップ!!」

「あいてっ!!」

まずいと思い、ミシエルを即座に止めるエリサ。そして、何で決闘をしようと思ったか、これまでの経緯を話すこと5分・・・

「 というわけ、わかった？」

「・・・はい、お姉様がその方に恋愛感情をお持ちではならないという事がわかりました」

まったく論点がずれているミシエルにそこじゃない、と思わず突っ込んでしまうエリサ。

端から見ていると、ただの仲のよい姉妹にしか見えない。

数時間後、ギルドの前の広場に集うギャラリーの中心にはエリサとリュウトが向かい合っていた。

最初、ミシエルがリュウトを見つけると喧嘩を売るような行動があつたが。

「それで、準備はいい？」

「ああ、いいぞ」

エリサの問いにリュウトは言葉少なげに返す。

「じゃ、マスターお願いします」

「はあ、わかったよ。町を壊すなよ？」

「善処します」「え!？」

エリサは流すが、リュウトは軽く驚く。

SSランカーは普通、町を単体で壊滅することができる。ゆえにギルドマスターは注意したのだ。

「それでは・・・初め!！」

審判を勤めるマスターの声により、決闘が開始される。

「イヤアアアアアッ!！」

エリサの気迫とともに白いロングソードが未だ、二刀を抜いていないリュウトに向かって迫る。

リュウトはそれをおおきくバックステップしてかわそうとする。

が、急に氷の刃がロングソードから伸びてくる。咄嗟に『ウインドカッター』を放ち、それを回避する。

《何だ、今のは!?!》

【多分、剣に氷魔法を纏わせているんだわ。ほら、あなただって纏わせているじゃない】

ルナの話聞き、納得するリュウト。

見るとすでにエリサは、こちらに向かって次の斬撃を放とうとしている。

すぐさま、二刀を抜刀しながら風の刃を放ち、妨害する。それに対してエリサは障壁を作り、防ぐ。

そんなことが何回も繰り返えされていく。時折、互いの攻撃が相手に届くがどちらの攻撃も明確な傷をつけることはないまま、一進一退攻防が繰り返られる。

ギャラリーはそんな二人の戦いに目が釘付けになっていた、ただ一名を除いて。

マスターが二人の戦いを見ている時、横から疑問の声が聞こえた。

「マスター、あれがこの間Dランクに上がったばかりの小僧か?」

話しかけてきたのは、チーム『紅』のリーダーハギだ。彼は驚いていた。

「ああ、そうなんだがな・・・」

マスターもあまりの戦いに茶を濁すような発言しかできない。

それも無理はない、たかがDランクの冒険者がSSランクの者と互角に戦い合っているのだ。目を疑いたくなる気持ちがあるが当然のよう

に出てくる。

そんな二人を尻目にリュウトたちの戦いは続いていく。

-----sideリュウト

放たれた氷の刃をかわし、こちらも二刀を振って様々な方向から風の刃を飛ばす。しかし、それらをたやすくかわされてしまう。さきほどから同じことが何度も繰り返されていた。

攻めることが出来ない状況にリュウトは少々焦りを感じてしまう。その焦りを見透かしたように、大きい氷の刃が向かってくる。反射的に『ダウンバースト』を発動させ、防ぐ。

っ強い！！

SSランカーとはこれほどなのか、と思うほど純粹にそう感じた。最初から本気で（いくら闇魔法で剣を強化してないといっても）向かって行ったはずだった。

しかし、結果は互角に見えているようで徐々に押され始めているのは自分のほうだった。

相手の剣を振うスピードも凄いが、なにより自分が放つ多方向からの攻撃をすべて防ぐ正確性には驚愕を隠せない。

そんな事を頭の片隅で考えながらもどうやってたらこの状況を脱せるかを考えるリュウト。

そんな時、ルナが話しかけてきた。

【苦戦しているみたいね。手を貸してあげるけど？】

《いらねえよ。これは俺の戦いだ。手出しは無用だ！》

【ふふ、そこまで言うんだから頑張ってね】

リュウトはルナの提案を断って、戦いに再び集中する。

- - - side エリサ

一方、エリサもリュウトの二刀を使いこなし、無詠唱で魔法を使う実力に驚いていた。

まさか、わたしと同程度の実力だとは思っていなかった！！

二刀の動きは洗礼されており、気を抜けばやられかねない。しかし、勝てないわけではない。戦闘が長引くにつれて焦りを見せている相手の隙をつけば勝てるかと冷静に分析していた。そのため、今はひたすらその時を待つ。

決着は思わぬことだった。

リュウトが『ダウンバースト』を放とうとしたところをエリサが同時に放った『アイスブレード』と『アイスピック』で足止めされ、瞬時に懐に入ったエリサの剣に喉を押さえられていた。

広場はしばらくの間、静寂に包まれていたがギルドマスターの「それまで！！」という声に一気に拍手と歓声に満ちる。

余談だが、その後ギルドでは宴会が行われた。しかし、いくら飲んでも大丈夫なリュウトと飲めないことを知っていて飲まなかったギルドマスター以外は全員酔いつぶれてしまい、翌日から数日間ギルドが全く機能できず、大量の依頼をリュウトが一人でこなしていたとか・・・

## 第九話（後書き）

次の話で第一章がおわりになると思います。

最近、文章が長くなる傾向があるので注意しなければ・・・

誤字・脱字のご指摘、感想をよろしければお願いします。

## 第十話（前書き）

大分待たせてしまってますいません  
ここではグランドマスターが出てきます

## 第十話

あのどんちゃん騒ぎから三日後、エリサたちは本部に報告をするためジグチから出て行った。

帰りはギルドの冒険者や街の兵士に見送られながら帰っていった。別れ際にエリサがリュウトと握手をしながら言った。

「いい戦いだつたわよ、リュウト」

「でも結果は負けだ」

「ふふ、ところであなたの実力は本当はDランクじゃないでしょう？」

小声で聞いてくるエリサ。

リュウトはそれに少し迷ったようなしぐさをするが、やがて

「さあな、それはこれからの楽しみということにしといてくれ」

「ええー、ずるい」。

まあ、楽しみしてるよ。じゃあ、またね」

「ああ、じゃあな。会えるかどうかすら分からないけどな・・・」

「それはどうかな？」

リュウトの言葉に小声でそう言うエリサ。

リュウトにその言葉は聞こえていない。

.....sideミシエル

ギルド本部に向かって走っている馬車の中で先ほどからミシエルは頭を捻っていた。

おかしい、おかしすぎる。

お姉様ことエリサがジグチを出発してからずっと楽しそうなのである。

「お姉様、何か楽しいことでもありましたか？」

「いいえ何も無いけど、どうかした？」

どうかしているのはあなたですとはとても言えないミシエル。

思い当たる節があるとすれば、あの青年と会ってからずっとこんな感じであることぐらいだ。

一体どうしてしまったのだろうか？恋愛感情？いいや、そんな感じではないと思う。

そう思い、聞いてみた。

「お姉様はリュウトという青年のことをどう思いですか？」

「クスクス、えっ？それってリュウトの事？」

「はい」

「そうねえ〜・・・面白いかな？」

「面白いとは、一体どのような？」

「うん、どんな風って存在自体かな？」

「はっ!？」

全く、分からない。存在自体？それって恋愛感情ということなの  
でしょうか？

ええい、何が何だかもう分からない。

ギルド本部に着くまでミシエルは馬車の中でうんうん唸っていた  
とっつ。

あれから二週間後、現在エリサとミシエルがいるのはギルド本部のグランドマスターの執務室で彼女たちは報告をしている。

「ここに書いてあることは本当か？」

グランドマスターは疑うような目を二人に向けながら言った。

グランドマスターは100年以上生きているエルフだ。故にさまざまな修羅場を体験してきた。

もちろん、経験だけでなく実力も半端ないため最強のSSランカーでもあるのは大陸の国々の重臣たちには知られている。

しかし、そんな経験豊富な彼でも今回のような報告は例に見ないのである。

「ええ、本当のことです。虚偽はありません」

「しかし、リュウトというたかがDランカーの冒険者に倒せたとは思わんのだが・・・」

エリサの報告に信じきれない顔を隠せないグランドマスターしかしエリサの発言で彼の表情は一変する。

「わたしも信じていませんでしたよ、彼と戦ってみるまで。

彼はわたしと互角に戦ってきました」

「ほお、なかなか面白い者を見つけたな。

どうせならはつきりとした実力が知りたいところだが・・・  
どっかの騎士団長を借りるわけにもいかんし。何かいい案が

無いか、エリサ？」

「ふふ、それならうってつけのものがありません、マスター」

「それは何だ？ワシには思い浮かばないのだが」

「おや、お忘れですか？あなたが強く推進しているものですよ」

「ああ、成程そういう事か。クツクツクツ、楽しみだのお」

「ええ、とても。血が騒ぎそうです」

「うふふふふふふふ」

「クツクツクツクツクツクツクツクツク」

そうやって人の悪い笑みを浮かべるグランドマスターとエリサ

それを見てミシェルはリュウトの無事を願いながら部屋の隅で震えていたというが、それはまた別の話

こうしてリュウトは知らず知らずの内に巻き込まれていく

## 第十話（後書き）

これで本当に一章が終りです  
次回は登場人物設定と世界設定をパパッと仕上げから第二章に行  
きたいと思います。

## 登場人物設定（前書き）

ごめんなさい。本当に申し訳ありません。

2章にいく前に登場人物と世界設定を載せました。

2章は明後日に載せます

## 登場人物設定

ごちゃごちゃして、忘れられると思うので（おもに作者が）一応書いておきます。

話が進めば、順次更新していきます

柏木竜斗 16歳

主人公

性格：一人称は『俺』。一見めんどくさがり屋だが、本当に心配している相手にはめんどくさがらずにしっかり手を差し伸べる。依頼された場合も同様。

人からの余計な詮索が嫌いなため、あまり積極的に関わらないようにしている。

前述から感情をなるべくコントロールしているため本音はめつたに零さない。

怒り方は静かだが、人を圧迫するような怒り方をする。元の世界では情報と世界史が得意だった。そのためこの世界で元の世界の知識を使えないかといつも考えている。

魔法：全属性・創造属性・時空属性が使えるが、前述のこともあるので使っている魔法の使用は限定している。また、膨大な魔力を制御するために体の中にリミッタを何個か付けている。

趣味：空を見ること

### 《ギルド登録設定》

名前 : リユウト

年齢 : 16

職業 : 剣士

属性 : 風・水

ランク : D ( )

言語 : 大陸共通語・皇国語・帝国語・古代語

ルナ 年齢不詳

リュウトが持っている腕輪の精霊( )。風の噂だと太古の魔女とのうわさがある。

性格 : リュウトをからかうのは好きでよくからかっている。しかし、300年も一人でいたためリュウトを始め、さまざまな人たちと話すのが実は楽しみ。

同様に300年前とは食文化がかなり違っているため、美味しそうな食べ物はずべて食べようとすると大食漢。

リュウトの知識不足を補うため、たびたび知恵を貸したりしている。また、探知魔法を使わなくても周囲の気配やものの数に分かる。

リュウトが異世界から来たことを知ってる。

魔法 : ?

趣味 : リュウトをからかう事、食べ物を食べること。

エリサ・ハーバ

年齢 17

ヒロイン。

性格 : 基本的には真面目。だがアクセサリーや食べ物には年相応の反応を示す。リュウトとは強化オーグの件で知り合う。

史上最年少でSSランカーになったため一部の冒険者たちにはアイドル扱いまたはファンクラブが存在している。二つ名は『氷姫』。

しかし、早くしてSSランカーに昇格したが経験的にはベテランのSランカーに劣る。

魔法：水・風・氷

趣味：アクセサリー探し・鍛錬（経験値稼ぎ）

ミシエル・クリサント 年齢15

性格：SSランカーのエリサの事を『お姉様』と呼んで慕っている。そのため、思考や行動がエリサ中心になってる。エリサを独占するために男性などには脅し、恐怖のメール・・・などなど、あげばきりが無い。しかもその行動にエリサが若干引いてることに気づいていない。

魔法：？

趣味：エリサを慕う事、エリサの事を考えること。

アクネア

年齢：（結婚してくれるなら教える）

ハーフェルフ。『毒蜘蛛』の異名を持つ金髪の妖艶な女性。オリハルコンで作られているワイヤーに毒を塗り、敵を毒殺することから『毒蜘蛛』の二つ名を与えられる。覇者に興味があり、エリサにリターンマッチをするつもりのリユウトに興味がある模様。

タルタン

年齢：38歳

人間。腕っ節でSSランカーになった巨漢でスキンヘッド。『怪力』というそのままを表す二つ名を持っている。しかし、使う魔法が『身体強化』だけだったので魔術師や細い奴は好きではない。そのため、細身であるリユウトやマンドレイクが嫌い。

マンドレイク・ハーバー

年齢：45歳

人間。『氷王』の二つ名を持つ男性。エリサの義父であり、師。二つ名の通り氷系統の魔法を得意としている。その威力はSSランクに相当する魔物でも数秒で凍らせるといふもの。目は氷のように澄んだ青。

当時、Aランカーであつた彼は魔物の襲撃を受けた村でたまたま生き残っていた子供のエリサを保護し、婚約者であつたマリアに養子として育てることにした事を言い、育てることにした。

チーム『紅』

ハギ

『紅』のリーダーであり、強化オーグと戦っていたリュウト救助隊を率いた人物。性格は義理厚い。犯罪者と奴隷を利用している国が嫌い（そのためイスカル皇国は居心地がいいとの事）。獣人であり自分が獣人であることを誇りに思っている。実はギルドマスターとは旧知の仲。

カイル

『紅』のサブリーダー。基本的に無口。性格は冷静沈着でその場で臨機応変に対応が出来る。リーダーであるハギに代わってチームを指揮することも少なくは無い。サブリーダー故か、チームの事から個人的な事に関して悩みが多い。

ジュリア

『紅』の魔術師のひとり。主に攻撃魔法に優れており、もうひとりの魔術師であるミシルと組まされる事が多い。実はチームで一番の酒豪で酔っぱらうと人格が変わる。

ミシル

『紅』のもうひとりの魔術師。ジュリアとは対照的に補助魔法に優れており、戦闘では前衛向きのジュリアとコンビを組まされ互いのフォローをしながら仲間をサポートする。酒にはあまり強くなく一杯でも酔っぱらってしまふ。

#### ケイル

『紅』で一番の新入り。新入りで八ギの見習いという事で酔っぱらったジュリアにもてあそばされるなど散々な目に遭っている。よくカイルとの模擬戦（という名のシゴキもとい地獄の特訓）をしているが今のところ全敗という成績。童顔でもある。

#### ギルド関連

#### ギルド

約1500年前から活動しており、その影響力は一国と同等かそれ以上と言われている。創始者は不明でどのような目的で創ったのも定かではないが、今の世界には無くてはならないものとされている。

#### ギルド本部

大陸の真ん中にあるダブルファルスという街にある。主にギルドの中枢が集結している。

#### グランドマスター

#### 名前：ギルゾーク

エルフ。元SSランカーであり今年で120歳。その長寿に裏打ちされた知識と経験により全国各地にあるギルド総本山のギルド本部のグランドマスターをしている。まだ、若いもんには負けないと豪語しており生涯現役のつもり。そのため後継者をまだ決めていない。

ジグチのギルドマスター

名前：不明（というよりも明かしてない）

ジグチのギルドマスターでリュウトに目を付けている人物。

案外、頼りになる人。でも上司の命令には逆らえない。

レイラ

フェニクスのギルドマスター

年齢：秘密（自称永遠の20代）

ダークエルフ。フェニクスのギルドマスターを勤めており、美人。だが、今のところ決まった相手はいない。というよりも、恋愛などで自分のやりたい事をできなくなるのは嫌だから。

## 世界の設定（前書き）

ネタバレあります

## 世界の設定

四季は基本的に元の世界と変わらない。

エスカルテと呼ばれる大陸はイスカル皇国・帝国・クルト国・エマ神国の四つの国によって成り立っている。

エスカルテの西北に帝国が、西南にクルト国が、南東にイスカル皇国が、北東にエマ神国がある。

北の大地は一年中雪が降っている。西、東、南は海が広がっており、海産物が盛んに揚げられる。

1000年前の戦争時（以後、1000年戦争）から不可侵条約をすべの国が結んでいるので表面上は平和になっているが、水面下では色々議論がされている。また、近年帝国とエマ神国の間では怪しい動きがある。

イスカル皇国・・・大陸内で比較的平和な国。さまざまな種族が入り混じって生活して

おり、土地も豊か。

帝国・・・人が建国し、獣人やエルフを奴隷として扱っている。そして大陸一の軍事力を

持ち、四国不可侵条約を結んでいても大陸征服を虎視眈々と狙っている。

クルト国・・・獣人が1000年戦争後に集まって建国したまさに獣人の国。

さまざまな獣人が集まっているため、それぞれの部族の代表から次の国の

統治者を決めている。

エマ神国・・・エマ教という宗教の発祥の地でもあり、宗教国として知られている。

トップは法王と呼ばれ、神託によって国を動かしている。

また、布教活動も各地で行っている。

この世界のお金の単位は

銅貨百枚で銀貨一枚

銀貨十枚で金貨一枚

金貨五十枚で白金貨一枚となっている。

魔法について

魔法は一般的には魔術と認識されている。そのため、ほとんどの者は魔術と呼んでいる。

魔術には下位、中位、上位、最上位などと、発動難易度と威力によって判別されている。『火』・『水』・『風』・『土』・『光』・『闇』の六属性に分けられており、それぞれ得手、不得手がある。

また、派生形として『氷』・『雷』などが存在する。

魔法を使うには必要な事が三つある。魔力の有無・想像力・魔法制御力。

魔力は人族やエルフ、ダークエルフ、竜人族などの大半は魔力を保有している。

想像力とはそのままだが、詳しくはどんな魔法を行使するかを頭の中にどの程度的確に思い浮かべることが出来るかである。想像力が皆無の者には例え魔力があるとしても魔法は使えないと理論上は言われている。

魔法制御力とはそれぞれの魔法を操るために必要な力。主に精神力

に比例する。精神が不安定であればそれだけ威力は落ち、命中率も悪くなる。怒りなどの激しい感情が湧きあがり、コントロールできなくなる状態のことを「暴走」と呼ぶ。

融合魔法・・・二つ或いは三つ以上の属性を合わせて発動する強力無比な魔法。

例 「火」 + 「雷」 || 「雷炎」らいえん 系統

召喚魔法・・・基本的には魔法陣を構築し、そこに魔力を流すことにより自分の望む魔物を召喚する。

術者の中には召喚した魔物と友好的な関係を築く者もいる。

例 氷狼フェンリル

ロスト・マジック  
古代魔法・・・古代に伝わっていたとされる魔法。ほとんど適性がある者がいないため、古代魔法を使える者は大変珍しいとされる。

## 《種族》

人間

大陸でもっともポピュラーな種族。身体能力は平均的。

獣人族

身体に動物の特徴を持っている人。例えば、猫耳だったり、尻尾だったり色々。

クルト国に多く住んでいるが、他の土地に住んでいる者もいる。

身体能力は聴覚、視覚、嗅覚、腕力、素早さが優れている。

一般的に魔法を使えない。しかし、種族によっては魔力を持っている種族もいる。

帝国ではエルフと共に奴隷にされていることもあり、

## エルフ

あまり世俗には姿をあらわさない種族。魔法が得意で人間の約二倍の魔力を宿している。しかし、戦闘能力はあまり高くないため、後方支援が多い。

いつもは森で集落を形成し暮らしているが、冒険者になりたい者が集落を出て行くのは珍しくない。

基本的に性格は穏やかで争いは好まないため、100年前の戦争も傍観に徹していた。

また、ダークエルフはエルフの中で突然変異したとされている種族。ダークエルフも魔力を持っているが戦闘能力もある。

冒険者ではダークエルフのほうがエルフより多い。

寿命は150〜200歳。

## ドワーフ

武器を生産する鍛冶職人に付く者の多くがドワーフであり、ドワーフは先天的に「武器の声」というものが聞こえる。そのため、ドワーフが作る武器は魔術付与などの特殊能力を有することが多い。

性格は職人気質の頑固で自分の認めた者でなければ武器を作ることはないとされている。しかし温和で争いは好まない。また、武器を持たせば右に出る者はいない。

## 龍族

太古から生きてきた最強の種族。

他の種族とは一切のかかわりを持っていない。存在も文献のみに残っているため、本当に存在するかもわかっていない。

文献にはエルフすら凌駕する知識と魔力を持っていると書かれている。そのため帝国では神、神国では邪神とされ畏怖の対象にされて

いる。

実際は北の大地の手前にある山脈の地下深くに存在している。

#### 竜人族

龍族の眷属という立場。竜人族はエルフと同じく長寿で誇り高い。

竜人族は竜化と呼ばれる身体変化をすることが出来る。普段は人の状態だが、竜化すると元の世界でいう西洋風のドラゴンとそっくりの姿になる。人型の時は身体はどこかに竜の鱗がある。鱗の色は個によって違う。

## 第十一話（前書き）

さあ、第二章に入りました。

PV15、000人・ユニーク3000人。ありがとうございます。

これからもよろしく願います。

## 第十一話

あれから一ヶ月が過ぎた。

リュウトはあれからも朝の鍛錬をし技を磨き、ギルドでは経験を積むため依頼をこなす日々が続いていた。時に、ギルドの冒険者たちと夜遅くまで酒を飲む。まさに平穩そのもの。

ある日、いつも通りにギルドに行くと扉を開けた瞬間、中にいた全員の視線がリュウトに突き刺さる。しかも、その視線が困惑と哀れさを醸し出していることから悩むリュウト。

リュウトがその視線に困惑していると一番の飲み仲間であるドワーフのカゼラが近づき、

「リュウト、がんばれ」

そう言って離れて行く。ますますわけが分からなくなるリュウト。

「おい、リュウトこっちに来い！」

そんなリュウトにマスターの声がかかる。リュウトは困惑しながらもギルドマスターの部屋に向かう。

部屋に入ると、何かの紙を広げて見ていたマスターがいた。リュウトに気がつくともマスターは職員を下がらせた。

「何の用ですか？」

「お前、武闘大会って知ってるよな？」

「ええ、まあ知識だけありますけど……」

あー、神様知識の中に入ってたなそんなこと。  
武闘大会というのは読んで字のごとし、大陸での強者決定戦だ。  
一年に一回、どこかの国で行われる大陸最大といっても過言では  
ない祭りだ。

ちなみに開催国は四つの国を順繰りと決めて行くらしい。

閑話休題。

「それが何ですか？」

「いや、実はそれにお前に参加させろっていう辞令が届いちゃっ  
てさ」

「……へえ、そうなんですか………って何で  
!?!」

「ナイスリアクション！申し訳ないが俺にもわからん。そしてこれ  
を実行しなければ俺の首が飛ぶとまで書かれている!?!」

「はいつ!?!?それ嘘ですよね」

「……残念だけど事実だ!?!」

キタね「……………!!人の首を人質に取ってんじゃネエエ  
エエエエエエ……………!!」

「ちなみにどちらからの手紙で？」

マスターは手紙を裏つ返したりして顔を少し青ざめながら差出人  
の名前を言った。

「ギルド本部長のグランドマスターと……」

「と？」

「SSランカー『氷姫』」

「『氷姫』って誰ですか？」

今度こそ顔を真っ青にしながらマスターはゆっくりと言った。

「エリサの……事だ」

「ふむ、……殺そうかな？」

「ストップ……!!」

黒いオーラを体から出し、笑いながら部屋を出ようとするリュウト、それを止めようとするギルドマスター。

職員の話ではその日、執務室は今まで聞いたことのないほどのさかっただという。

数時間後

やっとリュウトが落ち着きを取り戻し、席に座ったことで話は再開された。

「で、どうする？」

「どうするもこうするもないでしょう。俺が出ないとあんたの首が飛んじゃうんだから……」

「……すまん、恩に着る。」

それでは今年の武闘大会の概要について説明する」

えーと、それから2時間弱ぐらいの説明がされたが、その内容を要約すると

- ・今年も皇国の大都市フェニクスで行われる
- ・そこまで行く手段は護衛任務をするか、自力で行く（つまり歩き）。

- ・優勝すると金貨100枚!!

・大会には個人戦と団体戦があり、どっちで優勝しても賞金は金貨100枚もらえる。

・武闘大会の主催者はギルドであるため、大会参加者には宿と宿代が出される。

・・・だそうだ。

「移動手段については心配しなくていいぞ。お前にはもう移動手段を手配している」

「本当ですかッ!！」

これは助かる。なんたってこれから移動手段を考えなきゃいけないのはきついからな。

きつとVIPサービスなんだ」

「お前にはチーム『紅』と同じ護衛任務に就いてもらう事にした」

「えーと、なんで？ギルドが無理やり？」

「いや、『紅』も武闘大会に参加するようだからな。それにあいつらの護衛依頼に一人の空きがあったからだ。『紅』はいいチームだからこれをチャンスだと思っってよく見ておけ」

あーナルホド、経費削減ってやつですか。トホホ・・・悲しいね。でも、いい経験かもしれないなチームの事を知れるなんて・・・

そんな事を思いながら、リュウトは無事(?)武闘大会の開催地、フェニクスに行くことになったのであった。

余談だが、

「ちなみに出発はいつですかね？」

「ああ、明日だが・・・大丈夫か？」

「早っ!!!今から荷造りしないと。あっ、宿って引き払ったほうが

いいですよね?」

「ああ、そつちのほうがいいな。どうせならあつちでしばらくの間生活しろ。そつちのほうがこつちも忙しくなくて楽だ」

「ヒデエ！俺ってそんなに迷惑ですか?」

「当たり前だろ。お前が起こした事を思い出してみろ!」

「……すいませんでした」

「そ、だから……よろしく(笑)」

なんて辛辣なお言葉、俺のガラスのハートが壊れる、などと騒いでいるリュウトをしっしつと手で追い払うギルドマスターなのであった。

## 第十一話（後書き）

今回から2話ぐらい旅路の話です

## 第十二話

えー、リュウトこと俺はただいまチーム『紅』の人たちと共にフェニクスに向かっていている途中です。

あれから俺はハギさんに集合場所と時間を確認し宿に戻り、荷造りをした。

護衛対象は恰幅のいい商人のおっさんだった。どうやらフェニクスは大都市故に皇国のあらゆるものが集まるらしい。そこに武闘大会となればさまざまな国の人たちが来て稼ぎ時というわけだ。

おっさんもそれを狙って行くという説明が馬車の中であった。

俺の役割は屋根の上に登って警戒することであり、ここまで3日間にはモンスターに襲われることもなく順調だ。あと、一日もすれば着くだろうとの見方だ。

中からは談笑の笑いが聞こえてくる。のどかで平和そのものだ、そう思いながら監視を続けていた。その時、

【ちょっと、リュウト。賊が後ろにいるキャラバンを襲っているわよー！】

急にルナから話しかけられ、危うく落ちそうになる。

《それは本当か!?!》

【ええ、もうすぐでこの馬車も巻き込まれるわよー!】  
「ちっ!」

俺は舌打ちをしながらも中にいる『紅』と商人に言う。

「後ろのほうから賊に襲われたキャラバンがこっちに向かって来て

るみたいです!!」

「何？それは本当か？」

「ええ」

「わかった。ジュリアとミシルは魔法の準備、ケイルは依頼人クライアントの安全確認、俺とカイルはキャラバンが横を通る時に飛び移るぞ!!」

「……了解!!」

「リュウト君はどうする？」

「俺もキャラバンに飛び移ります、と言いたいとこなんですけどあつちはもう限界っぽいのでお先に行かせてもらいます！」

そう言っただけ俺は『フィジカルバースト』を瞬時に発動させ、賊たち近づくと。

《ルナ、サポートよろしく》

【わかった。任せなさい!】

《頼りにしてる》

俺はそう言いながら賊の真ん中に突っ込む。

「なっ！何だ？こいつ」

「構うな!! やっちまえ!!」

いきなり現れた俺に賊たちは一瞬驚いたようだが、すぐに俺に斬りかかってくる。しかし、その攻撃の遅いこと、遅いこと。

即座に4、5人をまとめて斬り伏せる。

初めて人を切った時の感触に恐怖と共に吐き気がこみ上げてくる。それを無理やり押し留めて、次のターゲットを探す。

見ると、賊の一人が一人の女の冒険者の後ろから近付いている。

目の前の敵に気を取られていて彼女は後ろの奴に気が付いていない。剣では届かないので魔法を使ってそいつを切り刻む。その光景に

周りの賊が釘付けになった一瞬に再び魔法を発動。

それにハツと我に返った賊たちが反撃しようとするがもう遅い。すでにキャラバンのほうにはハギさんとカイルさんの二人が、前からはジュリアさんとミシルさんの二人が攻撃魔法で次々に賊を葬り去っていく。

その光景に恐れをなしたのか、次々と散り散りになっていく賊。ひとまず俺たちはキャラバンを連れ、その場を後にした。

-----sideハギ

私たちは武闘大会のあるフェニクスに行くために護衛任務を引き受けた。

今は馬車の中で話をしている。すると突然、

「後ろのほうから賊に襲われたキャラバンがこっちに向かって来るみたいですよ!!」

「何？それは本当か？」

屋根で監視をしていてくれたリュウト君から知らせがきた。驚きながらも俺は即座に指示を出し、備える。私とカイルは飛び乗るが彼はどうするのだろうかと思ひ、聞いてみると

「俺もキャラバンに飛び移ります、と言いたいところなんですがあつちはまだ限界っぽいのでお先に行かせてもらいます！」

と言ってきたではないか。そんな無茶なと思っていると彼は肉体強化を自分に掛け、飛び出して行ってしまった。

「なっ!!いい、いくらなんでも一人じゃ、あの人数は相手にできませんよ、リーダー!!」

切羽詰まった顔で俺にそう言ってくるカイル。確かにそうだと思  
い、ジュリアとミシルに急ぐよう言おうとしたとき、私は我が目を  
疑った。

いきなり、人の波にのまれたかと思うと4、5人一気に斬り倒し  
たのが見えた。私たちがキャラバンに乗り移った時には彼が一人で  
賊の3分の2を倒していた。

私はその光景に見、内心唾然としていた。

そうなりながらも私たちはキャラバンを連れて安全なところまで  
行き、その日はそこで休んだ。

夜番はリュウト君が引き受けてくれたのでゆっくりと休むことが  
出来ると思っている反面、彼は今までずっと夜番をしていることに  
気づいた。明日の夜番はこちらが引き受けようと思いつながら私は意  
識を手放した。

-----sideリュウト

あれから俺たちはキャラバンに乗っていた冒険者と依頼人に感謝  
された。行き先を聞くと俺たちと同じだったので一緒に行くことにな  
った。

ちなみに俺は賊たちから離れるときに吐いてしまいその間、ルナ  
に見守られ続けた。

キャラバンでは奇跡的に被害が少なく、商人がホツとしていたの  
が印象的だった。そして、今俺たちは野営の準備をしている途中だ。

「じゃあ、リュウトさんはあの『氷姫』と戦ったんですか？」

「まあな。途中までは互角だったんだけどね、最終的には経験の差  
で負けたよ」

「でも凄いですよ、あの『氷姫』様と互角に戦えるなんて」

ほわわ〜んとなり、俺と今話しているのはキャラバンに雇われていた冒険者の一人であるソルンさんだ。

彼女は俺とエリサの決闘のことを風の噂で聞いており、それで俺に話しかけているらしい。

ちなみに『氷姫』というのはエリサの二つ名だそうだ。

《そんなものなのか、ルナ？》

【彼女がそう言ってるのならそうなんじゃない？わたしも知らないわよ】

《あまり目立ちたくないんだけど・・・》

【もう腹くくりなさい！！】

俺はルナに怒鳴られて落ち込む。しかし、目立ちたくないのは本音だ。

目立てばどっかの国からの招待があるに決まっているからだ。

ま、あったとしても俺は全力で断るけどね

そんな事を話しながらも着々と野営の準備をし、準備が終わったところで女性陣が作った料理を食べる。

この世界の料理は元の世界に比べ味が薄い。そのため、まずは無いんだが何か物足りなさを感じてしまう。醤油がほしいと思ってしまうのは日本人の性か、などと思いつつながら食事を終わらせ、夜番をする。人数が多くなったため、キャラバンの冒険者たちが自分たちもやると言ってきたがハギさん以下俺たちの説得を受けしづしづ寝袋に入ったが、すぐに寝てしまい俺とハギさんは苦笑した。

賊に襲われ、余ほど疲れたと見える。

俺が一人になると隣で控えめなしかし目立つ光を放ちながらルナ

が実体化する。

「どうやら、ルナは俺の魔力を使えば実体化できるようでこの旅路の間、夜になると実体化してくるので夜番は俺が毎日引き受けることになった。まったくもって迷惑な話だ。」

「今夜は星が綺麗ね」

確かにこの世界は余計な光が無いため、星が綺麗に見える。夜番をさせられるのは気に食わないが。

「ああ、そうだな」

そう言いつつ俺はルナを盗み見る。はっきり言ってルナは綺麗だと思つ。

「なによ、そんなに見て。もしかして惚れちゃったの？」

そう言つてクスクス笑う。俺は慌てて目を夜空に向け、ごまかす。

「んなわけあるか！」

顔が熱くなっているのが分かる。

「ふふ、冗談」

「頼むからやめてくれ」

「いやーよ、面白いんだもん」

言いながら俺の肩に頭を乗せてくる。

精霊なのでシャンプーなどは使ったことが無いはずなのに、髪からは柑橘系の匂いがして落ち着かなくなる。

「おい、何のつもりだ？」

「・・・いいじゃない、少しぐらい。300年も誰とも会話出来ずにいたのよ。」

「300年か・・・」

俺は思わず呻いてしまう。俺だったら耐えきれずに発狂していただろう。それをこいつは一人で耐えてたというのか・・・

「わかる？この苦しみが、寂しさがあなたに」

「・・・ああ、わかった。でも少しだけだぞ」

「ありがとう、リユウト」

しばらくしてルナを見ると俺の肩で寝ていた。仕方がないのでしばらくそうさせておいた。

こうして4日目も夜は無事に更けていく。

## 第十二話（後書き）

誤字・脱字、感想をお待ちしています。

## 第十三話

翌日、俺たちとキャラバンはもうフェニクスの近くまで来ていた。

「おおー、街が見えてきたぞー!!」

そんなカイルさんの声と共に全員街の方角を見た。

「・・・でかいな」

「おつきいね」

「久しぶりだな」

順に俺、ソルンさん、ハギさんだ。

「あれ、ハギさんは来たことがあるんですか？」

「昔、武闘大会に出たこともあるぞー!」

「『『『えっ!!』』』」

「・・・ん？言つてなかったか？まあ、気にするな」

ハギさんの発言に皆、急に騒ぎ出す。

その時後ろからものすごい砂ぼこりをあげながら来るものが視界に入った。

「何だあれ？」

【あー、あれは昨日の賊の残党ね。どうするの？】

「はあ、面倒だ」

そう愚痴りながらハギさんに声をかける。

「すみません、ハギさん。後ろから昨日蹴散らした賊の残党が来るみたいなんですけど・・・」

「何!? 皆、いますぐ」

「俺がかたづけますんで、皆さんは先に街に入って警備兵に知らせてください」

「で、でも、他にも数人残ったほうがいいんじゃない」

「心配いらない。一人のほうが立ち回りやすいですしね」

ソルンさんの言ったことを否定する俺。ほかのみんなはまだ納得できなさそうな顔をしていたが、これは譲れない。

「わかった。」

「ハギさん!!」

「だが、私たちが戻ってくるまで必ず生きてろ!! いいな」

「はい!!」

ハギさんはそう言ってまだ何か言いたそうな俺を除くみんなを馬車に乗せ、街に全力で向かった。

俺はハギさんに心の中で感謝しながら賊が来る方向に身体を向ける。

【これで本当によかったの?】

「ああ、ハギさんたちが帰ってくるまでに終わらせる。だからサポートよろしく」

【はあ、わかったわよ】

「さて、武闘大会のウォーミングアップといきますか」

そんな事を考えながら、不敵に笑うリュウト。鋭く、甘さのない目で。

- - - side 賊

「頭、奴らが見えてきましたぜ」

一人の賊が頭と思われる人物にそう言う。  
頭は

「ああ、俺にも見えてる。てめえら、仲間の恨みを晴らすぞ!!」

「「「おおおおお!!」」」

頭の掛け声に雄たけびを上げる部下たち。

「なんだあ？一人だけ残ったぞ」

「ひゃひゃひゃ、奴ら自棄になりやがった」

「これは楽だな、おい」

「しかもガキだぞ、ありゃ」

「オレたちも舐められたもんだ。一気に蹴散らすぞ――！！」

そう言いつつ、賊たちは残っているガキつまりリュウトを蹴散らすべくスピードを上げる。その先に待ち構えているであろう地獄も知らずに……

- - - side 八ギ

私たちは今、全力で馬車を飛ばし街に向かっていく。

「なんであそこでリュウトさんだけ残したんですか？」

責めるように言ってくるのは確か、ソルンという女性だ。

「そうですね、リーダー、今からでも戻りましょう！！」

血気盛んに言ってくるケイル。その他のメンバーは何も言っていない。

「ケイル、君はもう忘れたんですか？」

「????? 何をですか？」

思わずため息をつきたくなる。そんな気持ちになりながらも説明する。

「ソルンさんたちは知らないかもしれませんが、彼は冒険者成り立  
ての頃にゴブリン100匹倒しているんです」

「「「えッ!?!?」「」」

それを聞いて、絶句するソルンさん達。ケイルは「そう言えば・  
・」などと言ってる。

まあ、そりゃそうですね。新人がいきなりゴブリン100匹  
倒したなんて聞いたら。

私でも聞いたときは嘘かと思いましたよ。

「だから私は彼に任せることにしたんです」

「でも……」

「分かってますよ。だから急いで街に向かっているんです。間違っ  
ても死なれては困りますからね」

まだ何かいたそうなソルンさんも私がそう言つと黙り込み、馬車の中は沈黙に包まれた。

そのころ、フェニクス街内のある屋敷ではふたつの人影が向かい合っていた。

屋敷の中はカーテンが閉まっているのか、部屋の中は暗く、人の顔も判断しにくい。

それでも片方が男というのは外から入ってくる僅かな日光によってわかる。が、もう片方の人影は影に身を潜めるようにして顔の表情がわからない

「計画は順調ですか？」

「……ふん、聞かなくても貴様にはわかつているのだろう？」

「おや、これは失礼しました」

人影に自分の言葉に笑われているように感じ、苛立っている様子の男

「だが、これは貴様のおかげでできることでもある。その点は感謝している」

「いえいえ、実現できるのはあなたの力あって、ですよ」

「お世辞のつもりか？ふん、どうせ貴様は傍観の立場なのだろう？」

「……ええ一応」

少しの間をおいて人影は答える。

そんな様子を訝しげに見ながら男は言葉を続ける。

「まあ、よい。これが成功すれば、私が・私が・…」  
「……………成功すればの話ですがね」

人影は小さい声で呟き、まだ何か言ってる男の前から音もなく姿を消す。その事に男が気づくまで多少の時間が必要だった

## 第十三話（後書き）

すみません、これから一週間の更新に戻りそうです。本当にすみません

## 第十四話（前書き）

さて、これで旅路編は終了です  
最後のほうはグロイです・・・

## 第十四話

-----sideリユウト

あいつら、結局真正面から突っ込んでくるのかよ。いやになるぜ、まったく

道の真ん中でそんなことを思いながら、リユウトは向かってくる賊に牽制するための魔法を放つ。

「『ウインドカッター』」

奴らは目の前を通った風の刃に全員、足を止める。

「何を怯えてやがる。相手はガキただ一人だ。やっちまえ!!!」

頭と思われる人物の発言により、全員がハッとしたりリユウトを囲む。

「へへ、降参するなら今のうちだぜ、小僧」

賊の一人がそんな事を俺に言ってくる。

「.....」

「おい、怖くなって声もでねえか？」

それを聞いた瞬間、俺の取るべき手段が決まった。

「.....らない、.....も.....な」

「あ？今なんていった？」



リュウトは同時に襲い掛かってくる数多の光を体を捻り、弾き、避ける。

避けた先に見えた敵のみぞおちに正拳突き（ストレート）を当て、昏倒させる。

リュウトは剣を抜かず、体術のみで敵を蹴散らす。

【後ろから来てる！！】

ルナの助言を受け、後ろから来ているやつには裏拳を当てる。

リュウトの攻撃を受けたものは一人残らず倒れていく。

そんな風に時折、ルナのサポートを受けつつ的確に相手の攻撃を避けながら、一人また一人と気絶や動けなくさせていく。

気がつくと後に残っているのはひげも髪の毛もじゃもじゃのＴＨＥ・山賊といえる男だけだった。

「テ、テメエ・・・よくも俺の仲間を俺が殺してやる」

「安心しろ、殺しちゃいねよ・・・もう諦める。もうすぐ街のから援軍が来る」

「くっ！だ、黙りやがれ！！勝手に人様を悪だの邪魔だの言われたが俺たちだって、こつちだって命がけで生きてんだよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう言って手に持っているポロポロの剣を俺に向かって振ってくる。俺はそれに手を伸ばし、

バキインツッ！！

手で握り、純粹な握力で砕いた。

「確かに、お前だけが悪じゃあないな。だが・・・」

「はあっ！？な、何を言ってるやがる！？」

賊の頭が呆けている隙に後ろにまわり、手刀で意識を刈り取る。

「……世界を統べる上でそういう存在は不可欠だと俺は思う」

もはや、届いていないことは明確だったがリュウトは最後まで言い切った。

「くだらない、本当にくだらないよ。『正義』なんて物は……」  
【……………】

リュウトの言葉は誰にも聞かれず、風に流されていく。

しばらくして、リュウトは周りを見渡し、賊をどうしようか考え始める。

「はあ、縛るか……。ルナ、手伝ってくれ」

「……………」

ルナは何も言わずに実体化し賊の身柄を縛るのを手伝った。

二人はただ黙々と作業をするのに徹した。

結局、ハギが率いる警備兵たちがリュウトの元に戻ってくるのは全員を縛り終わった後だった。

警備兵たちは驚きながらも嬉しがつていたが、ハギにはリュウトが少し悲しそうな顔をしているのが気になった。

その後、フェニクスの牢に入れられた賊たちは牢に入れられた時に目を覚まし、全員が生きてることに感動するがそれはまた別のお話。

警備兵が賊たちを回収した後、リュウトたちはフェニクスの街に入り、宿を取り皆で食事を取ることにした。

「それでは無事にフェニクスに着いたこととリュウトが賊を捕らえたことを祝して乾杯！」

「くくくくくかんぱーい！！！！」「」「」「」

ハギさんの掛け声で宴会(?)が始まった。

「いやー、それにしても一時期はどうなることかと思いましたよ。

本当にハギさんたちには感謝し切れませんよ」

「やめてください。冒険者として当たり前のことをしたまですから。」

それに今回の一番の功労者はリュウト君でしょうに」

「あー、それもそっか」なんて会話が聞こえてくるが、無視だ、無視。

(それにしても来ちゃったなー、フェニクス)



もうすでに、先輩方は自分たちから寝ているか、裏バージョン・ジュリアによって殺されているかになってしまった。

ジュリアさんを除く女性陣もひどく酔っており、所々、服がはだけていて目に衛生上好くない。

いや、俺としては嬉しいんだよ、ほんとに

さらに！！知らない間にルナまでお酒を飲んでおり、俺に絡んでくる始末

「ねえ、リュウト、少しはわたしとお話しようよ」

ルナのキャラが完全にぶっ壊れてる！！もっとクールじゃなかったけ？

かわいいよ、ムチャクチャかわいいんだけど、十文字固めをしなからはやめてクレーーー！！

「300年分を埋める勢いでね」

無理ッス、ルナさん。

さらに

「リュウトくん、お姉さんと　しようよ」

はい、来ました。18禁。

とりあえず、暴走してるジュリアさんを魔法で眠らす。

「ルナ、話を聞いてやるからとりあえず離れてくれ「ええ」・・・  
・・・聞いてやらないぞ」

「・・・」

そう言うとルナは素直に体から離れていく。その隙に魔法を



## 第十四話（後書き）

お酒って怖いですね（ガクガクブルブル）

次回からは大会編です。

ご指摘・ご感想お願いします。

## 第十五話（前書き）

悲劇の宴会の翌日です。

## 第十五話

チュンチュン、パタパタパタ……

どうもおはようございます。すっかり朝です。

周りには昨日の酒で死んだ方々（主にケイルさんとカイルさん）が寝ております。ちなみにここは宿ではなく、酒場です！！

それから数時間後……

「あんたも大変だな」

そう俺を労わってくれるのは宿屋の主人。

ルナはあのまま寝てしまい、俺の腕輪に戻っていた。

しかし、それ以外の人たちは全くと言っていいほど起きる気配無し！！

そこで急いで宿をとり、全員を転移させた。

主人はその時の俺にひどく同情してくれて、三部屋も貸してくれた。

ちなみに金は皆の懐から払っておいた

そうして全員を寝かした後、俺はこうして朝食を絶賛食べているというわけ。

朝食はレッドドラゴンの肉炒め煮、シュワンガニのグラタンだ。

いや、ありがたい。

「まあ、仕方ないです」

「強いな、青年」

「ありがとうございます」

やべ、マジで涙出てきそう。』田　に　まるう』じゃないのに・

「じゃあ、起きたらギルドに行ったと伝えといてください」

「合点承知！」

うわっ、マイナーな受けだな。でもありがとう  
そんな事を思いつつギルドに向かう。

ギルドに入ると、何やら兵士たちがやたらといた。

何だろうと思いつつ、近くにいた2mはあるおっさんに聞いてみた。

「すみません。なんでこんなに兵士たちがいるんですか？」

「うん？お前誰だ？」

「あ、俺リユウトと言います」

「俺はタルカンっていうよろしくな、小僧」

小僧って言われたよ。初めてだ、こっちに来てから。

「よろしくお願ひします、タルカンさん」

「やめてくれ、タルカンでいい。それで小僧は何が聞きたいんだ？」

「えーと、なんでギルドの中に兵士がいるかなんですけど・・・」

「ああ、その事か。なんでも昨日、賊を捕まえた奴に謝礼金を渡したいみたいなんだよ」

俺はそれを聞きめまいが起きそうになった。単なる賊をとっ捕まえただけなのに、なんでそんな事になってんだ？

「そんなに有名だったんですか、その賊？」

「ああ、ここらじゃ有名だったぜ。』旅人殺し　新米冒険者殺し

『つて言われてな』

うそだろツ。俺はそんな奴らを誰も殺さずに捕まえちまったのか  
!!

これは失態だ。とにかくくばれないようにしなくては・・・

俺はタルカンに礼を言い、ギルドの受付に向かった。

とりあえず、大会の予選まであと一週間もあるので、簡単な依頼  
をこなそうと考えたのだ。宿代のこともちろ

んあるのだけど・・・皆、明日まで絶対動けないだろうからな。  
稼げるうちに稼がないと。

「すみません、一週間以内でできるDランクの依頼を全部持ってき  
てくれますか」

「全部ですか？少し時間がかかりますのでお待ちください」

5分ぐらい待っていると奥から受付の人の頭を越すぐらいの紙束  
を持ってきて受付に置かれた。

「もしかして、これ全部・・・ですか？」

「はい、そうです。あ、検索は私がやるので触らないでください。

あと、失礼ですがギルドカードのほうをお見

せいただいてもよろしいですか？」

俺は素直にギルドカードを見せると受付の人は一瞬だけ驚いた表  
情をしたように見えた。

しかし、すぐに元の微笑に戻ってしまい、見間違えかなと思った。

「お勧めとかつてありますか？」

「そうですね。うん、近場がいいですか？」

「そうですね、大会に向けて準備をしたいですし・・・」

「やっぱりそうですね。ちょっと待っててください」

再び奥に入って行く受付嬢。なにがあるのかな〜と思っていると戻ってきて

「マスターがお呼びです。私について来てください」

・・・また、巻き込まれそうだな。なんとなく予感がして憂鬱になる。逆らうわけにはいかないか

しばらくその人について行くと面会中と書かれてあるプレートが下がっている扉の前で立ち止まる。そして、ノックをした後に扉をあける。

部屋の中にはダークエルフの女性とスーツ姿の男性がテーブルをはさんで座っていた。

「彼は一体誰だね？」

「彼がそうなのね！」

男性のほうが目立つように、女性は立ち上がりながら歓喜を抑えた声でそれぞれ聞いてきた。

「ええ、その通りです、レイラさん。そしてハリス様、説明しますので落ち着いてください」

「す、すまない」

「こちらも今、判明したことですから仕方ありません」

受付嬢が女性のほうに頷き、男性に注意を促す。俺に至っては状況が飲み込めずに混乱している。

「すみません、そろそろ説明してくれませんか？」

俺に言えたのはそんな事だった。しかし男性を除く2人は俺の言葉で我に返ったようだ。

「す、すみません」

「まずは自己紹介からね。私はこのギルドのマスターでレイラとい  
います。種族は見ての通りダークエルフよ」

「わたしはこの街を治めているハリスです」

それを聞いた俺はさらに混乱した。この街のトップの2人が何で  
ここにいるんだ？

「俺は「いいわよ、あなたのことはジグチのマスターから聞いてい  
るわ」!!!」

「それでは説明するわ、ハリスさん。彼は報告でもあった強化され  
た魔物を単体で倒した者です」

「彼がか!？」

「ええ、本当です。どうでしょうか?この話にはうってつけだと思  
いますけど・・・」

おゝい、すみませ〜ん、俺を省いて勝手に話を進めないでくれ!!  
俺の心を呼んでくれたのか、俺の傍に立っていた受付嬢さんが咳  
払いをして2人の注意を引いた。

「お話し中すみません、そろそろリュウト様に説明をしていただけ  
ないと・・・」

「ああ、そうだったわね。ごめんなさいね」

「これは失礼しました。では、私から説明させていただきます。い

「いですね、レイラさん？」

「ええ、お願いします」

長い前座がやっと終わり、本題へと入る。

レイラさん達が座り、俺もレイラさんの隣に座る。

「まず、この発端は2ヶ月前に遡ります。2ヶ月前??？」

そんな言葉で始まった話は俺が予想もしなかったことだった。

????? 数十分後

えーと、ここまでの情報を整理しよう。

・2ヶ月前からクリンストーン伯爵という貴族がおかしな動きをしている

・最近になり、何者かが武闘大会の有力関係者を襲っている

・武闘大会に妨害する旨が書かれた警告状がハリスさん宛てに届いた

「嫌がらせなどの可能性は？」

「それは無いわ。足がつかないように手配されていたわ」

「そう、ですか・・・」

相手はかなり、慎重で抜け目がないみたいだな。これじゃ手掛かりは限りなく零に近い。

「で、俺に何をさせたいんですか？」

「君、武闘大会に出るわよね？」

「ええ、目的がありますから」

「目的、ですか。まあ、それは触れなくておきましょう」

それはありがたい。SSランカーにリベンジマッチするためなんて言ったらどんな顔をされるかわかったもんじゃない。

「あなたにはクリンストーン伯爵の身辺を探っていただきたい」

「……俺は情報屋ではありませんよ？」

「分かっているわ。だからこそその武闘大会なの」

「つまり、武闘大会で優勝しろと？」

「ええ、優勝者はパーティーに呼ばれるわ。そこでクリンストーン伯爵に接近して調べて頂戴!!」

無茶苦茶だ、言ってることが。武闘大会で優勝は分かる。しかも、その後のパーティで接近しろか。

しばらくの間、リュウトはどうやったたら成功させられるか、もし依頼を受けるとすれば何を条件にするかなどを考える為に黙る。しかし、2人は勘違いをしているのか、若干心配そうな顔を見合わせていた。

「いいですよ、引き受けますよこの依頼」

「ほ、本当に!!」

「でもそれには皆さんの協力が不可欠です」

「???例えばどんなことをすればいいのかしら?」

「そうですね……。まず、伯爵の家には諜報系の人間を入れてますか?」

「ええ、腕利きの三人が家に使用人として忍び込んでいるわ」

「それではその三人に今後は連絡をしないように伝えてください」

「理由を聞いてもいいかしら?」

レイラさんは俺の言ったことの意味が分からないのか、首を傾げて

いる。

こんな人がギルドマスターでいいのだろうか。俺は知らず知らずのうちのため息をついていることに気づく。

「考えても見てください。相手は手紙に足がつかないように注意がしてらるんですよ。おまけにギルドの諜報員を入れても怪しいことが何も無いなんて余程、慎重に行動している他ありませんよ」

「だったら、引き揚げさせればいいのでは？」

「それは相手に自分が諜報員ですと教えるのと同じことです。もし、知られたら相手は尻尾も出さなくなりますよ」

ハリスさんの疑問にそう答える。そう言うと2人は黙り込んでしまった。悩むのも分かるが内部から分かなければ、外から働きかけるしかない。

「ああ、それとこの街で一番腕のいい情報屋を紹介してください」「情報屋？情報だったらギルドでも提供できるのに何をするつもりなの？」

「簡単なことですな。ギルドにはギルドの、情報屋には情報屋の情報網があるという事ですよ」

「ああ、成る程。じゃあ、早速調べさせるわ」

ハリスさんの言ったことに納得してくれたみたいだ。

レイラは早速、ギルドの職員にこの街で一番腕のいい情報屋の居場所を調べさせた。

すると、十分もしないうちによく利用し懇意にしていると名乗りをあげる男性の職員が出てきたのでリュウトは彼に案内されることになった。

リュウトが彼についていくため席をはずそうとした時、彼は思い出したように言った。

「ああ、言い忘れてましたがあとひとつ条件を言ったおきます。それは……………」

2人はリュウトが何を言うのか頭の中で思考し始める。  
リュウトが言ったのは2人の想定外の言葉だった。

リュウトが出て行った後、レイラとハリスは安心したような顔をして話していた。

「いや、一時はどうなるかと思いましたが……………」

「ええ、彼が引き受けてくれて安心したわ」

そう言ってレイラは、んんっと伸びをする。

「……………」しかし、彼の提示した条件にはさしもの私も驚きを隠せませんでしたよ」

「確かに、ね。でもよかったじゃない。愛娘を嫁にくれなんて言われなくて」

「うっ」

レイラの思わぬ言葉に呻いてしまうハリス。  
リュウトが提示した条件はシンプルだった。

それは『大会優勝者が指名したSSランカー一人との戦いを許可してほしい』というものだった。

今、リュウトは情報屋がいる場所に向かうため、入り組んだ迷路のような道をロクスという男性の案内で進んでいる。初めのほうこそ右、左・・・と数えていたリュウトだが途中から覚えられるわけが無いと諦めて、ただロクスの後をついていくことだけに専念していた。

「それにしてもかなり遠いんですね」

「ええ、彼女はとても用心深いんで店まで行くにはこの迷路を抜けなければならぬんですよ。わたしも何回か迷ってますよ」

あはははと笑う彼に引き攣った笑みのリュウト。そんなに迷うんだっいたら、店を作らなきゃいいのには尋ねなかった。尋ねても「そうですね」なんて答えが返ってくるに違いないからだ。しばらくすると視線の向こうにオレンジ色の光が見えてきた。

「もうすぐ付きますよ、リュウトさん」

「ああ、つ、疲れた」

そんな事を言いながらロクスさんを見ると全く疲れていない。

《なんでこの人疲れてないんだよ?》

【行き慣れているからじゃないの。そういう人って結構多いわよ】

「そ、そういう問題なのか? うん・・・」

そんな思考の海に沈んでしまったリュウトを不思議そうに見るロクス。

「・・・ウト・・・リュウトさん、もう入りますよ」

「はっ!」

気がつくともすばらしい傾いた家が目の前にあった。

「ここが情報屋さんの店？」

「ええ、そうですね？」

何を聞いているんだ？というロクスの視線に困惑するリュウト。「いや、これがもしかしてフラグというものの成立なのか？」などと呟いてるリュウトに白い目を向けながらも扉をあける。

「いらつしゃい。あら、人と連れてくるなんて珍しいじゃない」

「いや、久し振りです。今回はこの人がメインなんで。ほらリュウトさん、彼女がご所望の凄腕情報屋ですよ」

その言葉にマイワールドに入っていたリュウトが我に返る。リュウトの目の前にいたのはテーブル越しにいるどこにでもいる普通の女性。だが、なぜか違和感を覚える。

「わ、悪い、ロクスさん。俺の名前はリュウト、冒険者をやってるわけあって、あなたの力を借りたい」

「なるほどねえ、わけありね。わたしの名前は情報屋でいいわよ」「いや、それだと分かりにくいんだが・・・」

「そうね、じゃ、エクスという事にしようかしら、いいわね」  
「そうたずねてくる」エクスに頷く。気がつけば、ロクスは店内から消えていた。その事をさほど気にせず話を進める。

「で、わたしに頼みたいことは何なのかしら？」

「ああ、あんたにはとある人物の身辺調査を頼みたい。これは調査費用と口止め料だ」

そう言いつつ、テーブルに金のはいつた袋を置く。ガチャツという音を立てたことより、かなりの金額が入っていることが分かる。

エクスは中身を確認して呆れる。彼女が呆れるのも無理はない。なにせ、中身は金貨10枚だったからである。ちなみに、この金貨は市長であるハリスとギルドマスターであるレイラが合同で出したものである。

「こんな大金を用意して一体誰を調べると言っんだい？」

リュウトはこれまでの経緯を説明する。それを聞いたエクスの表情は徐々に呆れ顔から険しい顔に変わった。

「成る程、事情はわかったよ。でも、あまり期待はしないでくれよ」「ああ、あんたに危険が及ばない程度でいい。それにあんたはこれからも長い付き合いになりそうだからな」

「クツクツクツ、それはわたしも思ってたよ。それじゃ、期限は武闘大会が終わって、パーティーが始まる前日まででいいんだね？」

リュウトと情報屋エクスはにやりと笑いながら、お互いの手を取り合った。

リュウトが帰ろうとするとエクスは慌てたように聞いてきた。

「リュウト、あんたとの連絡手段はどうする？」

「ああ、その事が。それならこれを使ってくれ」

そう言って、テーブルの上に出されたのは赤い宝石がついているイヤリングだ。

エクスは不思議そうにそれを見ながら尋ねた。

「これって……もしかしてあんたが作ったものかい？」

「まあな、それには念話とイメージを送ることができる魔法、あんなの身に危険が迫っているときには助かる道を作ってくれる魔法が掛かってる」

「あんた……これの価値を分かっているのかい？」知らん」……

・はあ、ありがたくもらつとくよ」

「それじゃ、調査よろしく」

「はいはい、任せなさ〜い」

そう言つてリュウトは店を出る。

エクスはリュウトの去り際の背中を思い出しながら呟いた。

「ふ〜ん、あれが噂の子か〜、面白そうな感じだったね〜」

それに実力を隠しているみたいだし……と笑いながら調査の準備をする。その眼にはさつきまで無かったエモノの匂いを嗅ぎつけた猟犬如しの鋭い眼光を放っていた。

「さて、こんな大金を貰つちやつたことには情報屋のメンツにかけてもクライアントリユウトの予想を上回る成果を上げないとね」

そんな言葉と共に知る人ぞ知る情報屋の主はひっそりと動き出す。

「どうでした、彼女？」

「ああ、聞いていた通りの腕前みたいだな。俺と会話している間もずっと気配を殺してるみたいだったし……」

「おや、気づいたんですか。わたしの場合は気づくのに三カ月ほど  
かかったんですがね」

彼女と対話している途中で、リュウトは何故彼女がどこにでもいる  
女性だと思ったのか気づいた。

彼女は異常なほど気配がしないのだ。それこそ、人の影のように。

「では、帰りましょうか。そろそろ、昼時です。おなかが減ってき  
ましたね」

「それは暗に俺におごと?」

「ええ。ここまで案内したんですから、そのお礼としたら安いもん  
でしょう?」

「……わかった。全面的に降伏する」

そう言ってお昼を食べに行った2人が所持金が無いことに気がつく  
のはしばらく経ってからだ、それはまた別の話。

## 第十五話（後書き）

今回から少し文章の量が増えていく予定です。  
よろしくお願ひします。

## 第十六話

リュウトは現在、ギルドに無事情報屋に会えたことを伝え、エントリー会場に向かっているのだが、

「つけられてるよな」

【つけられているわね】

ギルドを出た時点で2人（正確には一人だが）を尾行してくる2人組の気配がするのである。

何度か路地や狭い道、人通りの多い道を使い撒こうとしたが、未だに一定の距離を保ってついてくるのである。

しかも、気配の殺し方や歩き方から一流の者だと分かる。

「どうしようかな」

道にある露店の商品を見ている振りをしてどうするかを考えるリュウト。

そして突然、走りだす。当然、2人組はリュウトの後を追う。

リュウトが入り組んだ狭い路地に入るのを見た追手は全力でそこに駆ける。しかし2人が路地の入り口に立った時には既にリュウトの姿は無く、見えるのは路地の向こうの大通りだけであった。

どうやら2人のうち1人が魔術師のようで急いで探知魔法を使ってリュウトの居場所を探ろうとするが全く反応は無いらしく、見つからない。2人はとりあえず向こうの大通りに歩いて行く。

2人が大通りに消えてしばらくたち、リュウトの姿が路地の一角から突然現れた。

リュウトは咄嗟に『ハイド隠蔽魔法』を使い、追手の目をごまかしたのだ。

「あいつら、行ったかな？」

【ええ、近くにはいないみたい】

「よし」

ルナの答えにホツとし、エントリー会場に足を向けるリュウト。

歩くこと十分弱、なんの騒ぎにも遭わず無事にエントリー会場に着いたリュウト。

「……でかあ」

【……大きいわね】

リュウトたちはエントリー会場兼試合会場の大きさに圧倒されていた。

圧倒されながらもエントリー受付に向かう。

受付にいた2人のギルド職員は近づいてくるリュウトの姿を確認すると声をかけてきた。

「大会にエントリーする方ですか？」

「ああ」

「それではこちらの用紙に必要な事項を書いてください」

そう言われて出された用紙にすらすらと必要事項を書いていくリュウト。書き終わり、受付に返すと

「お名前はリュウト様、職業は冒険者でランクはD。間違えありません」

せんね?」

「ああ、大丈夫だ」

「それでは今大会の説明をさせていただきます」

そう言っただけの大会のルールが説明される。

まず、試合は予選から行われ、予選上位十六名が本選に行ける。

本選ではトーナメント式で行われ、一日二試合行われる。

原則として殺しは厳禁、相手が行動不能もしくは気絶によって勝負を決めること。

選手同士の接触も極力避けてほしいとの事だ。どうやら過去の大会で試合前のケンカで死亡した選手が出たらしく、そのための予防策だという。……一体どんなケンカだったのやら

さらに、今回は皇国内で行われるため、皇国近衛騎士団団長(つまりこの国で一番強いとされる人)が出場するらしい。

「最後にこちらが大会エントリー者の証であるプレートです。参加者の方々には出入りする度にこれの提示が求められます。つまり、これが無いと今大会の参加者とはみなされませんのでご注意ください」

そう言っただけ、透明なプレートを渡してきた。

「それには予選や本選での時間や場所、また次の対戦相手を確認できますので絶対に失くさないでください。」

受付の人の「絶対に」という言葉が強調された瞬間、若干恐怖を覚えた。

エントリーも終了し、今日は宿に帰ろうかななどと考えていたその時、

「あ、やっぱり来てたんだ」  
「……………」

そんな聞き覚えのある声が聞こえてきた。聞いた瞬間に殺意が湧いてしまったのは仕方ないといえよう。ゆっくりと振り向くと、そこには想像通りの人物がいた。

「久しぶり、リュウト」

そう言ってくるのは淡い水色の髪に色白の肌を持つ美少女というのがふさわしいエリサ<sup>元凶</sup>・ハーバー。

その隣にいるのはエリサの従者でもあるミシエル・クリサント。

「ああ、久しぶりだなエリサ」

リュウトはこめかみをひくつかせながらも冷静な声で答えた。

「で、隣にいるのは確か…………ミシユ、いや…………ミセ…………？」  
「ミシエル・クリサントです！！お姉様の護衛兼恋人です！！」  
「えっ！！」  
「っ！な、何を言いつてるのよ、ミシエル！！」

突然の恋人発言に驚くリュウト、エリサは間違いを正そうと躍起になっている。

「ま、まあ、人それぞれだと思うし別に俺は気にしないぞ」  
「私が気にするに決まってるでしょうがッ！！」  
「……………わかっていと思うが、冗談だぞ」

そんな会話が繰り返され、しばらくの間エリサは落ち込んでいた。

「はあ、まあいいわ。それよりもあなたでしよう？あんなことを頼んだのは」

「？何のことだ？」

「とぼけないで！優勝者がSSランカーと戦える権利が与えられるって話」

「あれ？もう知っちゃったの。そりゃ、残念」

「ふん、その言い方だとあなたは私に挑戦するようね、リュウト」

「当たり前だ。この前負けた分はきっちりお返ししないとな」

「じゃ、楽しみにしてるわ」

そう言って2人は愉快そうに言いあった。それを詰まらそうに見ているミシエル。

エリサとの突然の再会というサプライズイベントがあったがそれを無事にきりぬけ、宿に戻って来た。宿の主人はリュウトが戻ったのを確認すると声をかけてきた。

「おう、戻ったか。奴らも全員起きて、もう飯を食ってるぞ。」

ああ、良かったと思う一方で、昨日のようになるのかと思いがけんなりするリュウト。

そのリュウトの思いを表情で読み取ったのか、

「安心しろ、酒は出してない。こっちも昨日みたいにいられても迷惑だからな」

と言ってきた。

その言葉に安堵の表情を見せるリュウト。部屋に入ると、ジユリ

アやハギは酒が出ないので不満そうな顔をしていた。が、対照的にカイルやケイルはホツとした表情を浮かべてリュウトのほうを見てきた。リュウトがどんな顔をしていたかは言わずもがなである。その日はなにも起こらずにゆっくりと過ぎて行った。

数日後、ハギさん率いる『紅』とソルンさんの入っている『大いなる砂漠』は大会の団体トーナメントにエントリーしに行った。

俺は街をぶらぶらと当てもなく探索していた。

《……にしてもこの街は活気があるな》

【武闘大会があるからじゃない？】

《うーん、きっと普段から活気があるんだろうな。ほら、物流の中心とも言ってたじゃないか》

そんなことをルナと話しながら街をまわっていた。

隣の大通りに行くために路地に入り、何度目かの角を曲がったとき、

「そこの方、退いてください!!」

急に後ろからそんな声が聞こえ、振り向くと上質な服を着た少女が2人組の男に追いかけられていた。

彼女はそのまま俺の脇を通り抜ける。男たちも通り抜けようとする

るが、俺が足を出し転ばせる。すると、うまい具合に当たったのか  
男たちは折り重なったまま動かなくなった。

「ありがとうございます、助かりました」

後ろから聞こえた声に振り向くと、そこには先ほどの少女がいた。  
よく見ると顔立ちは整っていて美少女と呼んでも問題ないくらい可  
愛らしかった。動作は一つ一つが精練されており、どこかの貴族を  
イメージさせた。

「いや、別に感謝されることはしてないから。だけど、なんで君は  
追いかけていたんだ？」

俺はは感謝の言葉を流しながら疑問を投げかけた。

「そ、それは………」

すると少女は顔を微妙に強張らせながら答えようとした。が、

『おい、そつちにはいたか？』

『いや、いない。つたく、どこにいるのやら……』

そんな会話が聞こえ、足音でこちらに来るのがわかった。

仕方がないので俺は彼女に足払いをかけ、彼女の身体を抱えあげ  
た、俗にいうお姫様抱っこである。

「キ、キャツ！！な、何をするのですか！？」

「理由は分からないが追われているのだろう？だったら助けるしか  
ないだろう」

「……………」

「どこに向かえばいいのか、方向を指してくれ」

少女は顔を赤くしながら聞いていたが、俺の言葉に渋々といった表情をしながら、街の西のほうを指す。俺はそれに頷き、左右にある壁を蹴りながら屋根に着地する。

移動しているときに少女が名前を聞いてきた。

「あ、あなたのお名前は？」

「そういう時は自分から名乗るのが礼儀だろう」

「ご、ごめんなさい。わたくしのことはアリスと呼んでください」

「俺の名前はリュウトだ」

「リュウトさんですか？」

俺は自分がさん付けで呼ばれたことに苦笑する。そんな様子を不思議そうに見ていたアリスに言ってやった。

「呼び捨てで構わないぞ、アリス」

「あ、はい。分かりました、リュウト」

しばらくすると彼女が指した場所が見えてきた。そこは貴族などが利用する超高級ホテルだった。

「ここで降りしてください」

「おいおい、ここって一般人が泊まれる所じゃないぞ。たしか、今回の大会に参加する近衛隊隊長が泊ってる場所もここじゃなかったか？」

そう呟きながら、アリスを抱えながらそのホテルの前に着地すると兵士たちに囲まれてしまった。すると、奥のほうから

「なんの騒ぎだい？」

と言いつつ現れたのは、絶対にバレンタインにチヨコをたくさんもらうであろうと十分推測もとい確信できる、さわやか系のイケメンだった。

主人公補正がつきそうだなー、と思わず思ってしまったのは仕方ない。

「実は」

「ああ、そう言う事か。すまなかったね、巻き込んでしまった。しかし姫様、勝手に出歩いては困りますよ」

「ご、ごめんなさい、ラグ」

近くにいた兵士からの報告で納得がいったのか、こちらに謝って来た。さらに驚くべきことまで言った。

「ちよ、ちよつと待て、アリスが姫？」

「ああ、彼女はイスカル皇国第三皇女のアリス・イスカル・クリスチャン殿下だよ」

近衛隊がいたホテルに着いたので予想をしなかったわけではないが、驚いてしまう。

「す、すみません。ご迷惑を」

「い、いや、それについては謝らなくてもいい……というよりも敬語を使わないといけませんか？」

「あ、そのままの口調でお願いします。あまり、友人というものを持つたことが無いので……」

「あー、成る程」

まあ、一国の姫様となりやあお友達なんてできないか。  
そんなことを俺が考えていると、

「それよりも中に入って一服しないかい？あツ、君の名前を聞いていなかったね。君の」

「ラグ、そういう時は自分から名乗るのが礼儀でしょう？」

俺がアリスと同じことを教えなければならぬと思ったなら、アリスが先にたしなめた。俺がすこし驚いていると彼女はウインクをしてきた。

「それもそうですね、姫様。失礼した、わたしはラフアセル・グルクリス、親しい者にはラグと呼ばれている。イスカル皇国第三王女クリスチャン・イスカル・アリス殿下の近衛隊長を勤めている。そして、君の名は？」

ガチャツと鎧を鳴らす敬礼をし名前を名乗ってくる。その敬礼に思わず敬礼し返すたくなるのはかっこいいからだろうか？

「俺の名前はリュウト。冒険者で現在はDランカーだ。よろしく」  
「ああ、よろしく、リュウト」

俺らはそう言って握手をした。

そんな俺らのやっていたことが気に入らないのか、アリスはプイッと顔を背けてしまった。その光景にリュウトとラグは顔を見合わせて苦笑した。

「よろしければあなたのお名前を聞いてもいいでしょうか？」

俺が芝居がかったしぐさをすると彼女は機嫌を良くしたのか話に出した。しかも胸に手を当てながらだ。

「わたしの名前はアリス・イスカル・クリスチャン。このイスカル皇国の第三王女でもあります」

そんなこんなで自己紹介も終わったところで俺たちはホテルのラウンジの中に入っていった。

近衛たちの皆さんに睨まれたのはご愛嬌だろう。

「へえ、じゃありユウトも大会に出るんだ」

「まあな、ラグもだろう?」

「そうだね。ぼくの場合はアリス様の護衛で来たんだけど、彼女に頼まれてしまったね」

「因みにその時のラグは公務をする時より嬉しそうでしたよ」

「うッ」

アリス姫のお言葉に呻いて微笑が苦笑に変わる。

どうやら、君も男の性には逆らえないようだね、イケメン隊長、などと俺は心の中でひとりつぶやく。

いま、俺たち三人はホテルのラウンジでお茶をしながら、大会のことなどの雑談をしているのだが・・・

「わあ、おいしそうなお菓子ねこれは、いただくわ」

「「!!」」「……………」

ルナが急に実体化しリユウトの皿に乗っていたお菓子を食べ始め

た。

まあ、2人が驚くのは仕方が無いと言えよう。しかし、

「ルナ、せめて出てくる前に声を掛けてくれ。急に出てくるのは勘弁だ」

「ふふ、いいじゃない。たまにはサプライズも必要よ」

「リュウト、この美しい方は誰だい？」

「わたしにも説明を！！」

2人はルナの登場に思いのほか食いついてきた。

「どうどう、落ち着けお二人さん。あー、こいつの名前はルナ、俺の腕輪にいる精霊っぽいものだ」

「正確には名前はリュウトに付けてもらったものだけだね」

「精霊・・・っぽい・・・ですか？」

「うーん、認識としてはそれであってるんだけど、根本的なところだと違う存在よ。まっ、精霊って認識でいいわ」

「相変わらず、お前の説明は意味深だな」

「あら、これは心外ね。あなたのほうが意味深だと思つわよ。あの『氷姫』に互角とは言わないけれどそれに近い試合をしたのはどこのどちらさまでしたっけ？」

「えっ！！それは本当なのか（ですか）！！？」

コノヤロウー！！余計な爆弾を落としちゃがって。おかげで説明するのがめんどくさいじゃないか。

目の前にいるおふたりさんはこちらに興味津々といった目を向けてくるし・・・

あまり気は進まないが2人に少し前にエリサと決闘をして負けたことを俺は話した。

「なるほど、それにしてもあの『氷姫』様と決闘ですか・・・よく生きてられましたね」

「うん、それについては同意するよ。彼女は若いけれど実力は確かだからね。そんな彼女と互角に戦った君はやはり、強いみたいだね。ますます、戦ってみたくなったよ」

「どうやら、俺の話によって誰かさんは闘争心が燃えあがってしまったようだ。つくづくついてないね、俺って」

「ま、俺も優勝を狙う気だから勝ち進めば戦えるだろうよ。それじゃ、俺たちはこの辺でおいとまさせてもらう。ルナ、いくぞ」

「はい」

「それでは、道中は気をつけてください」

「アリスもな、今度街に出たいときは俺に話しかければ連れて行ってやるから」

「わあ、ありがとうございます」

「ああ、それは助かる。僕からも頼むよ」

目をきらきらさせてくるアリスと頼んでくる近衛隊長に手を振りながら、宿に戻るリュウト。

リュウトが去るのを見ていたアリスはリュウトが見えなくなると突然尋ねてきた。

「ラグ、リュウトってどのぐらいの強さですか?」

ラグロングはその質問にしばらく黙ってから答えた。

「……そうですね。少なくとも僕と同等か、それ以上でしょうね。彼のランクはともかく、あの『氷姫』と互角に戦ったほどですからね。間違いなく彼は今回の大会のダークホースですよ」

「ふふ、それは面白くなるそうですね。でも一番楽しみなのはあなたでしょ、ラグ？」

「ええ、騎士としてはリュウトがどんな実力なのか気になりますね」

そういつて二人はホテルの中に戻っていく。

片方はこれからの行く末を楽しみにしながら、もう片方は彼と戦うとき、自分はどんな戦いをそしてどんな気持ちで戦うのかと心の中で思いながら。

さまざまな思考や思惑が錯綜し緊迫する中、武闘大会は開かれようとしていた。

「おい、お前。そんなに菓子を持ってくるなよッ」

「え、だって余ってもつたいなかつたんだもん」

帰り道でそんな話があったのは本人たちしか知らないことである。

## 第十六話（後書き）

ハイドは相手から隠れる事ができる闇魔法です。

## 第十七話

『さあああー、やってきたましたあああ、第167回武闘大会  
！！』

そんな司会と共に武闘大会は開幕した。会場は満員、熱気で溢れている。

『今回はなんと皇国近衛隊長が参加してる！！しかも、特別ルールとして優勝者にはSSランカーとの挑戦権が与えられるぞー！  
！！』

「！！！！うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

『それでは、さっそく予選を始めますー！！！！』

「！！！！うおおおおおおお！！！！！！！！！！」

司会者の声に割れんばかりの雄たけびが重なる。

「うわ、半端ないなこの歓声」

「まあ、年に一回の祭りだからね。否が応でも盛り上がるわ」

「それにしても今年は盛り上がりすぎますけどね」

「あら、それならおいしいものが売ってるかも」

順にリュウト、エリサ、ミシエル、ルナの順番だ。SSランカーは指定席があるのだが当の本人は「ま、別に大丈夫よ」といい、リュウトたちと共にいる。ちなみに2人にルナの事を話したら、2人は驚きもせず受け入れた。2人曰く「珍しいのはかなり見たから（ましたから、主にお姉様で・・・）」という回答が出てきたときには啞然としたものだ。

傍から両手に花以上の状態だが周りからは嫉妬や羨望、さらには

殺気が籠もった視線を受けているリュウトにとってみれば生きた心地がしない。

そんなリュウトの気持ちを知らないのか、他の三人はのんきに予選を見ている。ルナは巨大クレープと格闘しているが……

予選は広い競技場に冒険者が集められ、25人になるまで戦う。

予選はA・B・C・Dの4つに分かれているらしい。リュウトはBだ。

そして、今はAグループの予選が行われている

『おつとー、怪力』タルカンが4、5人一気に吹き飛ばしたー  
『……!』

会場はわーわーと騒がしい。そんな歓声に耳が痛い。司会の中に知ってる名前が出てきたが気のせいだろう。

【大丈夫なの?】

《少し、つらいが我慢できないほどじゃない》

ルナが念話で心配してくるが、大丈夫と答えておく。

そんな事を話している間にグループAの予選は終わった。

『き、決まったー!ー!ー!これでグループAの予選は終了だ!ー!お次はグループB!ー!』

「はあ、それじゃ行ってくるよ。ルナはそろそろ戻れ」

「ええー、わたしはエリサ達と一緒にいる。予選ぐらいならわたし抜きでも乗り切れるでしょ」

「うんうん、リュウトの実力なら大丈夫だよ。安心して、ルナちゃんを連れて行こうとする奴がいたらわたしが凍らせてあげるから」

「……」

手の先に小さい氷を作り出しているエリサを見て、別の意味でルナを連れて行ったほうがいいなあと思ったりリュウトであった。

結果的にその心配は杞憂であったが……

リュウトが競技場に出ると歓声が観客席にいるよりは抑えられていることに気づく。何故だろうと考えていると前に聞いたルールに観客席には魔法障壁が張られていると言われたことを思い出した。

『それでは、グループBの予選開始イイツ!!』

司会者の声とともに予選が開始される。それを皮切りに次々と冒険者たちが向き合いながら戦い始める。

まともに闘うのは疲れると思ったリュウトは早々とハイドを使い隠れる。

一方、それを見ていたエリサらは

「卑怯だね」

「卑怯ですね」

「もふひょう（卑怯）」

と言っていたのだが本人の知るところではない。

閑話休題

そんな事してもいつかばれるのが世の中であって、リュウトも



「クツソー、何で当たらねんだよ！！お前も冒険者なら攻撃して来い！！」

そんな事を言っただけで自分の得物を振るがモーションが大きいので全く当たらない。リュウトは相変わらず避けることだけを反撃をしない。

避けてる合間に周りを見てみると始まったところは40人ぐらいいた選手が半分ぐらいに減っていた。

「そろそろ、選手も少なくなってきた。さあ、本選に進めるのは誰だ？」

「何っ！クソがさっさとこいつを始末しなきゃならねえのに……」

悪態をついているダグルに対しやっとリュウトが反撃に転ずる。

ダグルが両手剣を大きく振りかぶったところで懐に入り、大膽的となっている腹に向かって回し蹴りを入れる。

回し蹴りをモロに喰らったダグルは反対側の壁まで吹っ飛ばされ、轟音をあげながら文字通り埋まった。

「……………」

そんな光景に司会者だけでなく参加者や観客席にいた観客は唖然とする。参加者がリュウトの顔を脳裏に刻みつけ警戒心をMAXまで引き上げたのは言うまでもない。

「こ、ここでグループBも終了……！！」

そんな司会者の声が響き、残っていた選手はぞろぞろと入口に戻っていく。気絶した者などはギルドの医療班が治癒魔法を施している。

余談だが裏ではダークホースが現われたなどと議論されて急遽、賭けが始まったとか……

#### 閑話休題

「いや、疲れた、疲れた」

リュウトが三人の元に帰ってくると三人ともじり、と何故か責めるような視線で見えてきた。やや気圧されながらもリュウトは切り出す。

「ドウシタンデスカ、ミナサン？」

「いや、最後のほうは文句は無いんだけどさ」

「ええ、初めは一体どういうおつもりで？」

順にリュウト、エリサ、ミシエルである。ルナは手ネズミが出てくる遊園地で売られている菓子に似たものを持ちながら席の上で船をこいでいた。

「だって、めんどくさいじゃん。まじめに戦うの」

「………はあ」

リュウトの予想外の答えに2人は呆れる。表情には多少、諦めも入っていたが……

「まあ、本選じゃまじめに戦うよ」

「そう、ならいいわ。……もし、手を抜くことがあったら優勝し

てもわたしがそのあとでボコボコにしてあげるわ」

言葉の途中から常人が浴びたら失神してしまうほどの殺気が放たれる。周りの人間やミシエルはギョツとしていたが当のリュウト本人は涼しげな顔で立っていた。ルナはその殺気にようやっと目を覚ます。

「ああ、分かってるよ。じゃあ、ルナも起きたことだし街を見ながら歩こうぜ」

「それはいいわね。見てみたいアクセサリーもあるし」

エリサはリュウトの発言に殺気を抑え、つい先刻と同じような微笑みを返しながら賛成した。

「すみませんお姉様、わたくしはこの後予定が入っているので・・・」

「ああ、そうなの？なら、仕方ないわね」

「ホントにすみません」

「いいわよ」

出口に向かう途中で突然ミシエルが予定があるといい、離れて行く。

後もう少しで出口というところで後ろから声がかけられる。

「これはこれは、エリサ様ではありませんか。こんなところで会うとは何かの縁ですかな？」

「ゲッ！！」

エリサは嫌な奴にあったと言わんばかりの顔をした。しかし、振り返るころにはいつもの表情に戻っていた。リュウトは内心女ってコエーーと思ったのは生涯の秘密である。

「あ、ああ、お久しぶりです、クリンストーン様」

！！クリンストーンだと・・・

リュウトはエリサの口に出た名前に驚愕しながらもエリサに声をかけた人物を見る。

その男は細身だったが顔は脂ぎってギロギロしており、目は細い。走ってきたのだろうか、額には玉のような汗をかいている。エリサに話しかけてきた顔はだらしなくにやりきっている。

「ええ、久し振りですね。ところでお隣の方はどなたかな？」

エリサからリュウトに視線を移したクリンストーン氏は探るような眼でリュウトを見ている。リュウトはその眼を正面から見据える。そんなリュウトの視線に耐えきれなくなったのか彼は早々と顔をそらす。そんな2人の間に慌てて入ったエリサはリュウトの事を紹介する。リュウトも自分から話しかけるのは得策ではないと思い、エリサに任せる。

「彼は私の知り合いの冒険者でリュウトと言います。リュウト、こちらの方はクリンストーン伯爵のご長男にあたるヘルト様よ」

成る程、息子だったのか。リュウトがそんな風に納得しているとヘルトが満面の笑みで話しかけてきた。

「そうなのか。ヘルトです。よろしくリュウト君」

「ええ、よろしく願います・・・なんとお呼びしたらよいでしょうか？」

「そうだね、うん。ヘルトでいいですよ」

「そうですか。それではヘルト氏と呼ばせてもらいます。ところで

クリンストーン家はどんなお仕事を？」

相手の調子を取りつつ、クリンストーン家の情報を一つでも得ようとするリュウト。そんなリュウトに眉をしかめるエリサ。しかし、ヘルトは家の事を聞かれてうれしいのかぺらぺらとしゃべり始める。

「そうですね。我が家は主に魔道具などの取り扱いをしております。父上は王都のほうに出ておりますので最近は私が魔道具の売買を取り締まっております」

「魔道具……ですか……」

「おや、もしかして魔道具に関して知りませんか？」

「ええ、では今k 「申し訳ありません、ただいまから会議がありますので」……ああ、そうだったな。それではおふたり、私はこちらで。あ、暇なときに私の家に来てくだされば魔道具についてお教えしましょう」

「ええ、ありがとうございます」

ヘルトは傍らにいた秘書によって反対側の曲がり角に消えて行った。

エリサは姿が見えなくなっただけからはあ、とため息をついていた。それに疑問をおぼえたリュウトは彼について尋ねてみた。

「どうした？」

「苦手なのよ、彼。いい人なのは分かっているんだけどね、ちょっと……」

「しつこい、と……」  
「そゆこと。ま、気にすることでもないしね。行きましょ」

そんな会話をしながらも出口に向かって歩いて行った。

一方、ヘルトは角を曲がるとリュウトたちに見せていた柔和な微笑みを消すと冷然な表情になり、傍らにいた秘書に指示を出し始めた。

「今からリュウトとか言う冒険者の情報を集めろ」

「はい、分かりました。具体的には？」

「出身、年齢、交友関係、血縁者やいつどこで活動していたか、さまざまな情報でも良い！全て情報を集めろ！！場合によってはあいつらを動かしてもかまわん！！」

「はっ！了解しました、ヘルト様」

ヘルトの目はギラギラと光り、まだ見えぬ何かを見つめていた。

今、リュウトたちは一番賑やかな通りを歩いていて、そこは数々の露店や各国の特産物売る商人たちで溢れかえっている。

「それにしても人が多いな」

「武闘大会は祭りみたいなものだからね」

リュウトの言うとおり人が多く、気をそらしたらはぐれかねない。そのためエリサは『はぐれたらまずいね』と言いつつ、腕を組んできた。リュウトはいきなり腕を組まれて心臓の鼓動が速くなり、顔も赤くなってるのが分かる。なのにエリサは気にしてないのか顔色ひとつ変えずに進んでいく。しかし、なにしろエリサはSSランカーで有名だ。おかげで人ごみにもかかわらず、周りからは視線がきつい。

「ところで、どこに向かつてるんだ？」

「あれ、言ってなかったけ？」

「ああ、とにかくついて来いと言われるだけで説明は無かったぞ」

「・・・それはごめん。向かつてるのはなじみのアクセサリー店よ」

「ふうん、何を買いに行くんだ？」

「それは・・・あ！着いたからここで待ってて」

「あ、うん。分かった」

そう言ってエリサが入っていったのは大通りからすこし路地に入ったところにある小ぢんまりとした店だった。

どうやらエリサは店の奥で女主人と話しているようだ。リュウトは暇なので店の前に出てる首飾りや指輪などを見ていた。

しばらくすると落胆した表情で店から出てきたエリサが女主人に向かつて

「それじゃあ、見つかったら教えてください」

「・・・分かったよ、エリサの嬢ちゃん。でも、あるかどうかは分からないねえ。ももとの数も少ないし・・・。おや、そっちの子は・・・あゝあ、なるほどね。やっと嬢ちゃんにも春が来たってことかい」

やっとエリサと話してた女性はリュウトに気がついてたらしい。リュウトはその言葉に？が浮いていたがエリサは顔を真っ赤にして反論した。

「ち、違います。そんなんじゃないありません！」

「ほゝお、じゃそう言う事にしておこうか」

「本当に違います!!!」

「あのゝ、一体何の話デスカ？」

「……あんたには女心が分かってないねえ」

「まあ、俺は男ですからアイタツ」

「これだから、男は……はあ」

「??？」

殴られたうえ何故女主人にため息をつかれたのか分かってないリユウト。一方、エリサは先ほどの女主人の言葉から復帰したのか落ち着いた様子を取り戻した。

「とにかく、ホクルさん。例の物見つかったらよろしくお願いします」

「はいはい、分かったよ。入ったら連絡ね。じゃ、」

エリサはそう言ってまだ混乱してるリユウトを連れて店を離れた。

「ちょっと、例の物ってなんだよ？」

「え？ああ、わたしが探してるものはガノン兄弟が作った数量限定のアクセサリーなの」

「ふうん、つまり数量限定品ゆえに市場に出回る量も少ないからレアものということか？」

「ええ、そうよ。どっかで売ってないか探してんだけど、なかなかね」

エリサの話聞いてじゃあ俺もそれとなく探そうかな、などと密かに思うリユウト。

しばらく歩いてるとリユウトはふとした事に気づく。

「なあ、本ってどこに売っているんだ？」

「本？それならギルドに書庫があるわよ」

「えっ、そうなのか！？ふっふっふっ、今度本の山に埋もれてやる」

「うつ、なんか怖い事言ってるような気がするけど・・・気を付けてね、あそこは職員の人でも迷いやすいくらいの広さだっていう噂だから・・・」

「クツクツクツ、それぐらいの広さじゃないと書庫とは言えないぜ」

「これじゃ、もう手当もできないわね」

「「!!」」

話してる途中に急に現れたルナにびっくりして思わず固まるふたり。ルナはそんなことを気にしてない様子で周りを物色し始める。

「あ！あれ美味しそう。リュウト、お金頂戴」

「あ、ああ。あまり無駄遣いするなよ」

「うん、分かってるわよ」

リュウトからお金のはいつてる小袋を渡されるとそう言っただけという間に人ごみにまぎれて見えなくなる。

「・・・いいの、あれ？」

「無理なんだ」

「えっ？」

「食べ物がある目の前であいつに金を渡さないと大変なことになるんだ！」

「た、大変なことって？」

「・・・」

エリサがそうたずねるとリュウトは顔を真っ青にしてブルブル震えだす。その様子に危機感をおぼえたエリサは慌てて止める。

「も、もういいから。もう思い出さなくていいから！」

「ああ、ありがとう。お前は聞かないほうがいいぞ。聞いたらトラ

ウマになる」

そんなにヤバイの！！エリサはリュウトの尋常ではない態度と言葉に恐怖する。

後々、彼女はそれを身をもって知ることになるのだが、それを彼女はまだ知らない。

「金の事は心配するな。あいつもそれなりに分かっているし、腹が膨れたら戻ってくよ。それにあれで全部じゃないからな」

「あ、そうなんだ。それなら安心してごちそうになれるね」

「はい？い、今なんてオツシャイマシタカネ？」

「だから、あなたにごちそうしてもらうのよ。当たり前でしょ。それともあたしにおごと？」

「だって、お前のほうが絶対に俺より金あ」「バキツ！！」……

・・分かりました、ありがたくおごらせていただきます」

「ふ、よろしい」

「バキツ」という音はエリサが脚力で地面のレンガを割った音だ。人や商人の声でその音はリュウトしか聞こえなかったが脅しには十分だった。

ふふ、男つてのは女には到底かなわないんだな、とエリサの黒い笑顔を見ながら思うリュウト。

リュウトはそんなあきらめにも似た気持ちを抱きながらエリサお勧めの店に行く。

その後、エリサと食事をしている最中にルナが乱入してくるといふアクシデントがあったがそれ以外に問題は起こらず、食事の後は

エリサと別れて宿に戻ってきた。

「ただいま」

「おう、遅かったじゃねえか。夕食はもう下げちまったぞ」

「大丈夫です。外で知り合いと食べてきたんで」

「エリサの嬢ちゃんと、だろ」

「な、何で知ってんですか!？」

エリサと食事をしたという事を知られている事に驚くりユウト。すると、店の主人はなんでもないといい風な顔をしながら話し始めた。

「いや、お前さんよ。SSランカーのエリサって言ったら超が付くほどの有名人なんだぞ。どのだれかと食事でもしてみろ、すぐに身元まで分かるに決まってるんだろ。しかもお前みたいに全身真っ黒の奴なんてそうそういるわけでもないしな。因みにこの話はもう街全体に広まってる可能性は大だ」

「はあ!??うわ、明日からやりすら」

「そうか、お前は大会に参加していたな。頑張れよ」

リュウトはどうしたものかと頭を抱えながら部屋に向かう。

部屋に入る途中にケイルがリュウトにエリサと食事をしたのは本当なのかと聞いてきたので本当だと答えるとケイルは「うわあぁー!」などと叫び、倒れてしまった。ハギはそんなリュウトとチームのメンバーを物陰から見て頭を抱えていたのだがリュウトはそれを知るわけではない。

一方、エリサもエリサで宿舎に帰るとミシエルが目を血走りながらリュウトと食事をしたのかと問い詰められ首を縦に振るとミシエルはこの世の終わりのような表情をしながら「お姉様、一緒に死にましょう」などと言われ、何故こんなに思い詰めているのか困惑し

ていた。

## 第十八話

大会2日目、ついに今日から大会本選が始まる。朝、リュウトは大会に受付でもらったプレートにリュウトは本選第一回戦であること、対戦相手は依然話した事のあるタルカンと戦うことなどが記されている事に気がついた。そして現在、リュウトは会場の控え室で装備のチェックなどをやりながら出場の時を今か今かと待っているのだが……

『さあ、やってきたぜえー！！大会本選！今年も誰が、どんな戦いを繰り広げるのかたのしみだあー！！大会委員の調べだと今回の大会でどんでん返しが起こる可能性は十分にあると言われていぞ！全員、1試合も見逃すなよ！！さらに、本選からグランドマスターが解説に加わってくれるぞ！！』

「……わああああー……」

『ふおっふおっふおっ、相変わらず騒がしいのお。まあ、これが大会の醍醐味なのじゃがの。実は今回の大会はワシも楽しみにしているのじゃ』

『？と言うと気になる選手でも？』

『そうじゃないんじやが、一番の関心はやっぱり『優勝者がSSランカーとの挑戦権を得られる』と言うところかの。ワシもグランドマスターゆえにどのような者がSSランカーの誰に挑戦するかが気になるわけじゃ。もちろん、若者の成長を見たいということもあるがの……』

『なるほど、確かにその点は注目でもある。しかし、本選からオツズつまり賭けが許されているぜえー！！全員バンバン賭けまくれ』

「！」

「……うおおおおー……！！！！」

『ふむ、そろそろ始めるとするかのお？』

『おっと、それでは今から一回戦の選手を紹介するから、ご両人は会場の真ん中に来てくれ!』

やっとか。そんな思いを抱きながらリュウトは会場の真ん中に向かう。反対側を見ると相手のタルカンも槍を手に持ちながら中心に向かって歩いてくる。ふたりがある程度中心に近づくと司会者が話し始める。

『まずは、今大会が初出場、そして本選初出場のDランクの二刀流剣士リュウト!』

対するは、顔なじみも多いベテランに入るBランクの槍使い、タルカン!』

「クツクツクツ、まさか一回戦からタルカンさんと当たるとは思ってもいませんでした」

「それはこっちのセリフだ。お前が大会に出てるとは思ってもなかったぞ」

ふたりは苦笑しながら話す。リュウトは素手のままどんな動きにも応対できる構えを取り、タルカンは開始と同時に先手を取ろうと思いい、槍を小脇に挟んで構える。両者の緊張感が緩やかに高まってくる。

『若干ランク差が見られるがふたりはどんな戦いを見せてくれるのか!それでは戦いの前にオッズを公開だ!』

司会者の声に合わせて、会場の空中にスクリーンが浮かび上がりふたりのオッズが表示される。そこには、

リュウト：タルカン

『……ど、どうやら、大半の人がタルカンに賭けているようだ。しかし、まだ勝敗は決まったわけではない。両者はどんな戦いを見せてくれるのか!』

「……その通りだぜ、オツズはあくまでもオツズ。勝敗を決めるのは俺たちだ。だから俺はお前を全力で潰す!」

「ま、少し傷つきましたけど……その通りですね。しかし、俺には先客がいるんで……」

そう言っつて再び構えるリュウトとタルカン。

『ふたりはもういつでもいいようだ。しかし、リュウト選手は素手のままだ。いいのか?』

リュウトはその言葉に拳を突き上げることで答える。観客からは驚きや呆れなどの声が漏れる。

『……本選第一回戦、開始イイイ!!!』

「ハアアアツ!!!」

瞬間、タルカンは目にもとまらない速さで槍をリュウトに突き出す。槍はゴウツと言う風切り音を生み出しながら目標に向かう。

リュウトが『身体強化』をかける暇も無かったので反射的に避ける事を止め、受け流すことに決めた。ジャリツという手甲の削れる音と共に槍がリュウトの顔のすぐ横を抜ける。槍が伸びきったところでリュウトは体に強化魔法をかけ、追撃が来る前にタルカンの槍を蹴り、後ろに下がる。

「今の一撃、よく避けたな」

「いやいや、結構危なかつたですよ」

「避けずに受け流しといて良く言っぜ。ところでまだ得物は抜かないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タルカンは苦々しい表情をしながら言った。

リュウトは答え代わりとして素手のままで構える。

タルカンはそんな態度に憤ったのか、槍を大上段に構えると雄たけびをあげながら槍を突き出してくる。

その槍には雷が纏っているのがわかる。

「ウオオオオオー！！！」

『あれはタルカン選手の代表的な技のひとつ、『ラピッド』だあー！！！さあ、リュウト選手は雷を纏ったこの攻撃にどう対処するか！？』

「チツ、厄介な」

「オラオラ、どうした？早く、早く攻めて来いよ！！！」

次々に突き出される槍を受け流すこともできずにただ避けるしかないリュウト。そんな彼を見てさらに攻撃のペースを上げ、追い詰めようとするタルカン。しかし、そんな状況でもリュウトは今はまだ避けることに専念する。いつか必ず表れるチャンスを逃さないために・・・・・・・・

「ラグ、リュウトさん押されてますね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・僕にはそうは見えませんが・・・・・・・・」

「えっ！だ、だってまだ反撃さえできてないじゃない！！！」

リュウトの試合を見ながらそう話しているのはイスカル皇国第三皇女アリス・イスカル・クリスチャンと彼女の近衛隊隊長であるラファセル・グルクリスの二人である。彼らがいる席は皇族や各国の要人専用の席である。

アリスはリュウトの試合を見てどの程度なのか見極めようとしたのだが、リュウトは攻撃を一切せずに避けてばかりいるためだんだんと苛立ちが募っていた。そんな彼女とは対照的にラファセルのほうは落ち着いた様子で試合の行方を静観していた。

「彼は・・・リュウトは機会を狙っているのかと・・・」

アリスの問いに落ち着いた様子で答えるラファセル。そんな彼の答えに？を浮かべるアリス

「攻撃の機会ならこれまでもたくさんあったように見えるのだけど・・・」

「・・・もしかすると確実に当たられるように魔力が切れるのを待つとか、かも知れないですね」

「・・・なるほどね。だとすると今はただ見てるしかないのね？」

「そうですね、・・・（いったい君はどうやって終わらせるつもりなんだ？）」

ラファセルはアリスに頷いた後、小声で言った。アリスは聞こえなかったのか、リュウトの試合を熱心に見ている。

「あれが嬢ちゃんと言ってた子かい？どうやら、押されているよう

「ただど……」

「ええ、そうです。間違えありません、アクネアさん」

「わからねえな、どう見てもあの小僧はタルカンの野郎に押されているぜ」

「タイタン、あんたはバカだねえ。あの子は今も武器をまったく使っていないだよ。初めは攻撃を受け流してた。それだけでも十分に強いといえると思うだけだね」

エリサにアクネアと呼ばれた女性にそう言われたタイタンという大男は不満そうに鼻を鳴らす。そんな二人を見ているのはSSランカー達だった。

現在、エリサたちSSランカーは彼女と互角の戦いをしたと言われたリユウトの試合を見ている。ある者は面白そうなものを見るように、またある者は興味が無いのか目をつぶっていたりしながら観戦をしている。

エリサと話していた2人、タイタンとアクネアは共に名の知れたSSランカーだ。『毒蜘蛛』アクネア、『怪力』タイタンとして……

「それだけじゃねえ、あいつはムチャクチャ細かいじゃねえか！あんな体じゃろくに武器を振れないだろう！！」

「あんたに比べれば大抵の男は細くなっちまうだろうさ」  
「うぐっ」

アクネアがタイタンのそんな言葉を一蹴する。それに彼は悔しそうな表情をし、苛立つような雰囲気を出す。

そんな2人が口論していると低い男の声が割り込んできた。

「エリサ、本当に今戦っている彼が君と互角に渡り合ったのかね？」

「は、はい、師匠」

「弟子の君がそう言うならそうなのだろう。もうしばらく見させてもらおうとするか」

エリサの言葉に納得したかのように師匠と呼ばれた男は満足に頷く。そんな様子を見ていたタイタンが男をからかいだす。

「おや、『氷王』と呼ばれるあんたがそんな事を聞くなんて珍しいじゃなねえか」

「単純に弟子と同じ実力を持っているとしたらそれは師としては興味が沸くのでね」

「本当にそうなのか？俺はてつきり弟子娘そのものの心配をしてるのかと思つちまつたぜ。クツクツクツ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

笑うタイタンに黙る男。徐々に沈黙がその場を覆う。話題にされたエリサは居心地が悪そうにしている。

そんな場を壊したのが赤いポニーテールの若い女性の声だった。

「はいはい、タイタンもそれぐらいにしときなよ。マンドレイクが怒るからね」

「チイツ、わかったよ。スカーレット」

「助かった。ありがとう、レット」

スカーレットと呼ばれた女性はマンドレイクの言葉に首を横に振りながら応える。

「別に感謝されることじゃないよ。それに実力に関して言えばあなたが直に戦つてみないと分からないだろうしね」

「ああ、確か君はこの大会に参加していたな」

「そうです。あたしは記録上Sランカー扱いだからね」

そう、彼女　　スカーレットはSランカーでありながらSSランカーたちと同じ席に座ることが許されている不思議な冒険者なのだ。しかし、その事に対して周りにはいるランカーたちは何の疑問も挟まない。

「それではその件に関しては君に任せることにしよう」

「任された」

「でもレットちゃん。確か妹が来ているんでしょ？何か言われたりしないの？」

「……はあ、もう言われましたよ。『何でいつも姉上はそんな事をしているんですか？』ってお付きの人と一緒に言われましてよー」

ガンという効果音がピツタリの顔がしながら語るスカーレット。そこにエリサが追い打ちをかける。

「本当にスカーレットって妹さんに弱いよね。私は妹がいたらいいのって思うのにな」

「いいじゃない、エリサには彼がいるんだし……」

「え、えっと、な、なんの事かな？」

スカーレットの言葉に動揺するエリサ。そんな様子を見たスカーレットはニヤニヤしながら反撃とばかりにエリサに言う。

「え、隠すこと無いじゃない。昨日だって食事したんでしょ？リュウト君と、」

「それは本当なのかい、嬢ちゃん？」  
「な、何ッ！そんな事が……」  
「なるほどなあ、そう言う事が……」

アクネア、マンドレイク、タイタンと三者三様の反応をする。3人の様子を見てさらに笑みを深くするスカーレット。

「うっ、な、なんでその事知ってんのよッ」

「もう街中の噂が立ってるよ。『SSランカーのエリサには想い人がいる』ってね」

「無い無い無い！！それはたまたま、買い物に付き合ってもらったからであって、そんな感情はひとかけらもないッ！！」

「……………」

彼女の言葉に剥きになって一気に捲くし立てるエリサ。あまりの必死さに周りの人間は思いつき黙ってしまった。そんな中、マンドレイクは「もう、そんな年頃なのか……………」などと呟いていたが皆ガン無視。エリサは自分の言ったことに気がついたのが、「あわわわわ」などと言い、周りの失笑を買う。

いい意味での沈黙が降りる中、今まで沈黙していたひとりのランカーが言った。

「……………あいつ……………動くッ……………」

「えっ！それ本当か!？」

「それってリュウトって子のほうかい？」

「こくっ」

その行動にエリサを含む全員が一瞬で冷静になり、食い入るように試合の行方を見る。

タルカンは息を乱し槍を頼りに立っているのに対し、リュウトは構えを崩さないまま立っている。

「・・・はあ、はあ、な、何で・・・当たらないん・・・はあ、だ？」  
「な、なんと言う事だ！リュウト選手はタルカン選手の攻撃をすべ  
て見切っている！！さらにリュウト選手は息さえ乱れていない！！」  
「・・・そろそろ終わりにするか」

そう言ってリュウトは身体を前傾姿勢にする。俗に言うクラウチン  
グスタートである。そんな姿勢をとった彼を見て、タルカンも槍を  
構えなおす。観客も決着がつくのかと思い、水を打ったように静か  
になる。

次の瞬間、観客が見たものはギョーンツという音がしたかと思うとタ  
ルカンが盛大な音を上げながら壁に埋め込まれている姿であった。リ  
ュウトはというときまでタルカンがいたところに右手を前に出  
した姿勢のまま止まっていた。

しばらく、何が起こったのか全員理解できなかったが司会者に声で  
騒ぎ始める。

「な、何と言うことだぁー！！最後はまったく見えなかった！！一  
体、リュウト選手は何をしたのか！？マスターは見えましたか？」  
「・・・ちよつと見えたぐらいじゃのお」

グラウンドマスターは数秒間考えるようにしていたが言った言葉はわ  
からないというものだった。

グラウンドマスターが見えなかったと称したことで観客はさらに騒ぐ。

『と、とにかく、これで本選第一回戦の一試合目はリュウト選手の  
勝利だぁぁぁー！！！！』

リュウトはそんな司会者の声を背中に浴びつつ、会場から退場して  
いった。

## 第十九話

-----sideリユウト

「さっきのは一体何なんだ？」

観客席に戻った俺に言われたのはそんな言葉だった。言ったのは『紅』のチームリーダーであるハギさん。何故彼らがここにいるかというと、ハギさんを筆頭に「お前の實力を見てみたい（んです）！」と言われたからだ。その後、ソルンさんたちとも合流したらしいが……………

「えーっと、企業秘密ですかね？」

「……………」

いきなり沈黙が覆う。そんな沈黙を破ったのが魔術師のジュリアさんとソルンさんだった。

「一瞬だけだったけどあれは風魔法だったと……………」

「私も…………そう…………見えましたよ。正確には右手から出てるように見えたような気が……………」

俺は表情には出さなかったが内心ではふたりの発言に驚いていた。まさか、そこまで見破られていたとは思わなかったな。

【ちょっと、實力を計り損ねたようね】

《チツ、全くだよ。これは俺のミスだな》

【クスッ、精進しなさい】

そんな脳内会話(?)をルナとしながらどこまで話そうかなと考えていた。

「はあく、そうだよ。あれは風の中位魔法『ブラスト』ですよ」  
「えっ！そうだったんですか？」

結局、俺は使った魔法の事を含めて全部話すことにした。

「あれ？『ブラスト』って確か、全方位の魔法だったような……？」

「ああ、その通りだよ。俺が使ったのは右手を始点に『ブラスト』を前だけに飛び出すように制御したモノ」

「『！！！』」

俺がそんな事を言うのと魔術師である3人が驚いた表情の固まってるモシカシテ、オレ、マズイこと言った？

そんな疑問が湧いたがその疑問はハギさんが聞いてくれた。

「どうしたんだ、3人も？そんな驚くことでもないだろ。リュウトは中位魔法を使っただくらいだろ？そのくらいだったら一般的な魔術師だと言えるんじゃないか？」

「……私たちが驚いているのはそんな事じゃないですよ……」

「『えっ！！』」

ジュリアさんの言ったことに俺もハギさんと一緒に驚いてしまった。

「ハギさんとはかく、リュウトさんは本当に知らないんですか？……なら、教えてあげましょう」

ソルンさんは彼女の言葉に首を縦に振る俺を疑うような目で見ながら講義(?)を始めた。

「まず、魔法を使うには必要な事が三つあります。もっとも基本で重要なのは魔力の有無です。例えば人族やエルフ、ダークエルフ、竜人族などの大半は魔力を保有しているので魔法を使う事が出来ません。しかし、獣人やドワーフは魔力を保有していませんから魔法を使う事ができません。もっとも、獣人の中の一部に種族は魔力を持っているようですが……」

次に重要なのは想像力です。想像力とはすなわち、どんな魔法を行わせるかを頭の中にどの程度的確に思い浮かべることが出来るからです。例えば、火属性の下位魔法『ファイアボール』は形状が丸く、高温ということを正確に頭に思い浮かべる　　つまり、想像しなければいけないんです。だから、どんなに魔力がある人でも想像力が皆無の人には魔法は使えないと理論上は言われています。まあ、そんな人がいるとは私は思いませんですけどね……。っと、話が逸れましたね。えっと、今までに魔力の有無と……想像力の事を話したんですよ。あ、最後ですね。

最後に必要なのは魔法制御力(精神力)です。例えば、上位魔法を扱う際に必要な制御力を10とすると10以上の制御力が無ければその魔法は制御できないつまり『暴走』と呼ばれる状態に落ち入ります。『暴走』の主な原因は精神の傷ツキトラウマや余程の物理・精神的な衝撃が襲った時と考えられています。……説明が長くなりましたが分かりましたか？」

「えっと、皆さん。どうされたんですか？も、もしかして私の説明が間違っていましたか！？」

俺たちが黙っている様子を見たソルンさんはおろおろし始めながらそう聞いてくる。実はソルンさん以外の全員は彼女のあまりの説明

に驚きを通り越してポカーンとしているだけなのだが彼女は早合点しているようだ。一番早く我に返ったジュリアさんが慌てて否定する。

「ち、違っわー！あまりに凄い説明だったからみんな驚いちゃって……」

「ああ、そうだったんですか。ああ、良かった。勉強した甲斐がありましたね」

「「勉強？」「」

俺たちはその言葉に首を傾げる。ソルンさんは笑顔になって顔を縦に振りながら話す。

「ええ、私は子供の頃から魔法学園の教師になりたかったんですよでも……」

「諦めて冒険者になった、という事ですか……」

「ええ、そうです。ところでリュウトさんの異常なのはその魔法制御力です！！」

急に真面目になったと思うと俺の事をビシッと指差してきた。俺はそんな彼女の行動に動揺した。

「制御力……がが？」

「ええ、リュウトさんが使っている風属性の『ウインドカッター』や先ほど例を挙げた火属性『ファイアボール』などの下位魔法なら熟練の魔術師なら難なく軌道を変えることが出来ます。ですが、中位魔法や上位魔法は制御するのが精一杯なんですよ！だから、そんなに簡単にできるわけ無いんです！しかも、一方向だけじゃなくて、規格外にも程があります！……！」

「そうなのか？まあ、心のどこかには留めておこう」

制御はともかく、想像することはそんなに難しいことではないだろうと思ひ、そのことを聞いてみるとソルンさんは俺のことを睨んできた。

「……リユウトさんは想像力が豊かなんですね。普通の人はあまり魔法を見る機会には恵まれませんから。魔法を使おうとするなら大陸で唯一のファルセナ学園に行くか、魔術師に弟子入りして魔法を教えてもらうぐらいしかありませんから」

「そうなのか……でも、本などの書物に載っているときもあるんじゃないか？」

俺がそう言つと彼女は顔を若干引きつらせながら答えた。

「基本的に本や資料などの書物はギルドが管理しているか、ファルセナ学園の中にある大魔道図書館にありますから。ギルドは原則、冒険者が身分を証明できる人ぐらいしか利用できませんし、学園のほうは学園が認めた方かその学園の生徒のみ閲覧可能というのが現状です。というよりもこれは一般的な常識ですよッ？知らないほうがどうかしてますけど……」

「あー、ど忘れしてた。すまない」

ソルンさんとそんな会話し、俺が脳内に「この世界に一般人（主に国民）に出回っている書物の数はそこまで多くない」というメモしている横からケイルさんが声を掛けてきた。

「あのー、お話し中申し訳ないんですけどそろそろ近衛隊長の試合が始めるようですよ」

「えっ、ラg」えっ！！ラファセル様の試合が！！！リユウトさん、説明はまた後です！！！」……分かった」

ソルンさんは急に目を輝かせたと思うと即座に試合のほうを向いた。やっぱりラグってルックスいいし、近衛隊長だからもてるんだろかなあなどと考えながら試合に注目する。ラファセルの名前が呼ばれると観客の（主に女性が）歓声を上げた。

相手の選手は近衛隊長が相手だからだろうか、もう顔を真っ青にして震えている。それでも棄権しないのは冒険者としてのプライドがあるからなのだろうか。そんな事を考えている間に司会者の『開始イイ！』という声と共に冒険者のほうが動く。冒険者の武器は大きなハンドアックス。当たれば無事では済まないだろう。当たればの話だが……見たところラグの戦闘スタイルは直剣のロングソードに純白の盾で相手の攻撃を防ぎながら戦う一般的な騎士のスタイルだ。

「ああ、流石ラファセル様、華麗です」

「……確かに」

ジュリアさんの口調はともかく言ってることには同意できる。ラグの剣は観ているものを魅了する。なにより、剣をふるう身体に無駄な力が全く無い。入れるところはいれ、抜くところは抜いているところが絶妙だ。

そうこうしているうちに相手の得物はラグの剣に弾き飛ばされていく。そして相手が両手を上げたことによって試合は終了した。

「あっけないな」

「まだ一回戦ですからね。本気なんか出してないでしょ」

「そうだな。ここで倒れられても俺が困るだけだし……」

「何でだ？」

俺の言ったことがおかしかったのか、ハギさんは首を傾げている。

俺はそれを見てああ、まだ言っていなかったな、と思いラグと戦う約束をしたことを話した。

「お前って無謀？」

いつも無口なカイルさんには呆れられ

「私のラファセル様が破れるなんて無い!!」

何故かジュリアさんは怖い目つきで睨んでくる。

「『えええええっ!!』」「『』」

他の人たちは普通の反応してくれた。うん、俺もその反応が普通だと思うよ。

「ちょ、ちょちょっと待て、ああの第三近衛隊長ラファセル・グルクリスとこの大会で戦うことを約束したと・・・？」

「ええ、そうですね。というよりもあつちのほうから誘ってきたんですけどね」

「『『『『えええええええっ!!』』』』』」

再度驚く皆さん。そんな中、ハギさんは思いつめた顔をしながら俺に忠告してきた。

「まあ、死なない程度に戦えよ」

「???よく分かりませんが、とにかく宿に戻りませんか？」

「ああ、そうするか」

そうしてラグの試合を見終わった俺たちは宿に戻っていった。

-. -. -. side ラファセル・グルクリス

(ふう、一回戦は楽勝だったね)

そんなことを思いながら僕

ラファセル・グルクリス

は控え室に戻っていった。戻る途中でどっから入ってきたのか分からないほどの女性に囲まれたがそれもギルドの職員たちによって誘導されていった。

控え室に入ろうとしたとき隣の控え室から懐かしい気配を感じ、見てみるとそこには因縁の相手がいた。

(あまり、顔を合わせたくないんだけどな……)

そんなことを考えるが既に向こうは僕のことには気がついてるだろうから、いやいや扉を開けその人物に声をかける。

「久しぶりだね、グラン」

「………久しぶりだなあ、近衛隊長さまあ」

彼の名前はグラン。『狂戦士』の二つ名を持つSランクの冒険者であり、獣人の中でも1、2を争うと言われる強さの狼の獣人だ。今まで何度となく戦い、その度に痛み分けて終わっている因縁と言うよりも宿敵と言っても過言ではない相手だ。

「僕の名前はラファセル・グルクリスなんだけどな……」

「ふん、名前なんざ興味はねえよ。俺はお前と戦うことに興味があるんだぜえ。今回こそは俺が勝たせてもらうぜ!」

彼の二つ名にもある通り、彼は戦闘狂もつと簡単な言い方をすれば

バトルマニアだ。

そして、最後のくだりは毎回のように繰り返されているなじみの文句でもある。いつもならここで僕が「そっか、それじゃ」と言っていて終わるのだが、

「悪いね、今回はどうしても負けるわけには行かないんだよ」

「!!!・・・ほう、それは楽しみだねえ」

彼は僕の発言に驚いたのか、顔を大きく歪ませていた。実に楽しそうに。僕と戦えるのが心のそこから楽しそうに。

「それじゃ、またね」

今度こそお決まりのセリフを言っつてその場を後にする。

（確か、グランのやつが順調に勝てばリュウトと当たるはずだったな。でも、彼なら大丈夫・・・かな? いや、一応、友と言うことで忠告ぐらいはしに行こう）などと考えながら、彼は自分が守るべき者のそばに向かう。

-----side グラン

俺の名前はグラン。狼の獣人だ。巷では『狂戦士』なんて呼ばれてるらしいが俺にはどうでもいい。俺は試合に向けて準備をしていた。その時、懐かしい匂いが漂っていることに気がついた。

（この匂いは・・・!!・・・あいつか）

匂いの元が分かったことと思わず顔が歪む。きつと笑っているのだろう。扉の向こうで扉を開けようとする気配を感じ、すぐさま笑みを普段の仏頂面に戻す。そしてそいつは笑顔で俺にこういつてきた。

「久しぶりだね、グラン」

「……………久しぶりだなあ、近衛隊長さまあ」

名前で呼んでくるそいつに対し俺はそいつの肩書きを呼ぶ。するとそいつは苦笑しながら言ってくる。

「僕の名前はラファセル・グルクリスなんだけどな……………」

「ふん、名前なんざ興味はねえよ。俺はお前と戦うことに興味があるんだぜえ。今回こそは俺が勝たせてもらうぜ！！」

その通り、俺は名前なんて興味がない。むしろ、邪魔だと思ってる。そして宿敵にそう俺は告げる。いつもなら奴はこころ辺で引き下がるのだが何も言わない。俺はそれを不思議に思ったが次に奴の口から出てきた言葉に驚いた。

「悪いね、今回はどうしても負けるわけには行かないんだよ」

「……………ほう、それは楽しみだねえ」

俺は反射的に笑みを浮かべていた。あああ、やっとこいつが本気になりやがった。やっとだ。

しかし、その後そいつはいつもの言葉を交わし去っていった。

しばらくして、ギルドの野郎が俺のことを呼びに来た。その時にはあいつと戦うために俺は勝ち進んでやると決めた。例え、誰が目の前に立つても力でねじ伏せると……………

-. -. -. sideリユウト

「マスター、これもう一杯頼む」

「.....」

俺の言葉に無言で新しい酒を出す、白髪が目立つがどこかかっこいい老年のバーテンダー。

今の時刻は夜の10時を少し過ぎたあたり。

俺はハギさんたちと夕食を食った後、酒場に来ていた。ギルドの酒場ではなく、ある人物が指定した酒場だ。その人物とは.....

「やあ、待たせたかい？」

「いや、ここの酒のおかげで退屈せずにいられたよ、エクス」

後ろから聞かれた声に酒場のマスターに笑いながらそう返す。エクス  
情報屋の女性は苦笑しながら俺の隣に座る。

「いったい何杯飲んだんだい？」

「うーん、何杯だったかな？」

「はあ、15杯は飲んでいるでしょうね。しかも一番強いのを」

「.....リユウト、君って規格外なのか？」

「失礼なツ！！せめて異常なざると呼んでくれ！」

「どちらもあまり大差ないんじゃない？」

俺は何杯飲んだのか分からないのでマスターに聞いてみた。するとマスターは苦い顔をしながら言った。エクスは15杯も飲んでピンピンしている事に驚きを通り越して呆れているようだ。

そこは突っ込んだじゃだめでしょ、エクスさん。そんな様子のエクスに俺は心の中でそうツツコミを入れる。

さて、そんな楽しい雰囲気も味わったことだしそろそろ本題に入りましようかね。俺はそう考え、声を真剣にする。

「で、どの程度のことがかかった？」

「ん？ああ、あの事。ちよっと待って、マスター、あたしはいつものを」

マスターにそう言って、持ってきたカバンからを纏めた紙の束を渡してくる。

「一応、そこに・・・書いてあることが・・・今日の昼間までのことまでよ」

出された飲み物を飲みながら話すエクスに俺は紙束をペラペラ捲りながら尋ねる。

「怪しいところは？」

「んー、今のところ一人だけね。屋敷からあの貴族の坊ちゃんと一緒に出て行くのを見た奴よ」

「そいつってどんな奴だった？」

俺の質問に一呼吸入れてから答える。

「この街の奴でもないし、大会参加者でもない怪しい奴だったわ」

「尾行したのか？」

「まさか！そんなわけないじゃない！！あくまで私見よ」

俺の言葉が癪に障ったのか少し口調が強くなる。

「そうか。これからも引き続き、頼むよ。マスター、勘定」

「銀貨1枚と銅貨20枚です」

「はい。」馳走様」

「ありがとうございます」

俺は引き続き調査を頼み、店を後にした。

リュウトが出て行った後、店にはバーテンダーと情報屋だけになった。

「……また、厄介ごとを引き受けているらしいな」

はじめに口火を切ったのはバーテンダーのほうだった。情報屋はそれに対し、僅かに眉を上げたただけだった。

「盗み聞きは感心しないねえ、」

「止してくれ、その名前はもう捨てたんだ。今の俺はしがないバーテンダーだよ」

「悪い、悪い。情報屋故の性でね」

情報屋の言った名前に苦々しい表情をする彼。それに苦笑しながらも謝る情報屋。

ふと、彼は店を出て行ったリュウトを考え、気になることが浮かんだので聞いてみた。

「なあ、お前って初心者への依頼は断るんじゃないのか？」

その問いに僅かに悩んだ後に答えた。

「さあ、あたしにもよく分からないんだよ。何であんな坊やの依頼を受けたのか……」

「ふん。ま、人生、生きてりゃそんなこともあるだろうさ」

「それもそうだねえ」

そう言つて二人は笑いあう。

ヘルトは自室で秘書を通じて調べさせていたリュウトという青年についての報告書を見、手をワナワナと震わせていた。

「……これは……どういう事だ!!?」

「そこに書かれてる事が全てであり、真実だが……」

「そんなバカなことがあつてたまるか!!何故、ここ数ヶ月の事しか分からないんだ!!?」

ヘルトが報告書を渡してきた相手にそう怒鳴るのも無理はなかった。なぜなら、その報告書にはリュウトが数ヶ月前にギルドに登録したところからの記録しかなかったからだ。

「それは俺たちにも分からん。分かっているのはそこに書いてある、年齢、ギルドのランクだけだ。試しに部下に後をつけさせたがまかれたいらしい」

「そ、それではいったいどうすればいいんだ?このままではあの件は失敗してしまう。何かいいアイデアは無いのか?」

そんな様子のヘルトを内心で見下しながらも黒で身を包んだ男は落ち着いた口調で話す。

「そんなに慌てなくとも貴様のところにはあの魔道具があるんだろ？」

「？貴様、何を言っ……！！あれの事か！！」

男の言った言葉に驚愕するヘルト。しかし、すぐに頭を振ってその考えを否定する。

「し、しかし、あれは人間が耐えられるものではないぞ。誰に使うのだ？」

「ふふふ、決まっているだろう。……だ」

「た、確かにそいつなら耐えられるかもしれないが……保証は無いのだろう？」

「当たり前だ！だが万にひとつの可能性もあるかも知れないぞ」

ヘルトは悩む。自身が準備している計画を成就させるには男の言った通りにするべきだ。しかし、失敗したときには自分はすべてを失う。

ヘルトの心は揺れていた。しかし、

「……分かった。貴様がそこまで言うのだからその提案に乗ってやろうじゃないか」

こうしてヘルトは大博打をうつことになった。後に大きなツケがまわってくることも知らずに。



## 第十九話（後書き）

魔法についての設定を追加しました。

## 第二十話（前書き）

今年、最後の投稿です。

## 第二十話

### 大会本選二日目

現在、第二回戦二試合目行われており、リュウトやラファセルなどの参加者はそれぞれの控え室に入り、自分たちの番を待っていた。リュウトは三試合目、ラファセルは五試合目である。

(それにしても、司会者の声以外何にも聞こえないんだよな、ここ) リュウトは特に何もすることが無いので控え室に掛けられている魔法を解析することで時間を潰していた。最もそれほど難しくなく、すぐに解析でき、飽きることになったのだが。

『試合終了ウウウツ!!』

「あ、終わったな。行きますか」

【手を抜かないようにしてよ】

控え室に司会者の声が聞こえ、試合が終わった事を知ったリュウトはルナに注意されながら会場に向かった。顔はとても面倒くさそうだったが。

会場に入ると昨日に劣らず、多くの人が観客となって次の試合を楽しみにしていた。そんななかでも一番楽しみにしていたのはアリスだった。今はラファセルが控え室にいるので代わりに彼の副官が護衛として付いている。しかし、国王が心配して自分の隣に座らせている。どこでも親は子供の事が心配なのである。

「アリスよ、お前とラグの奴が目をかけている冒険者というのはあやつの事か？」

「ええ、その通りです父上」

国王が視線と指をむけたほうには今、会場に姿を現したりユウトの姿があつた。それにアリスは頷きながら肯定する。

「ふむ……まずはこの試合でお手並み拝見といくか」

「父上？昨日の試合で実力は分かったと思うのですが。なぜ、今日の試合なのですか？」

父である国王の言葉が納得いかないのか、理由を聞くアリス。それに少しばかり目を開いて驚く国王。すると彼は側近から紙を受け取って彼女に見せる。

「これは……トーナメント表ですよね？」

「ああ、その通りだ。ここを見てみるのだ」

父の言葉に従ってトーナメント表を見ていたアリスはどんどん顔を青くしていった。

「父上、リュウトさんは……大丈夫なのでしょうか？」

「それを確認できるのがこの試合だ。よく見なければな」

顔を青くした彼女の言葉を聞きながら、若き頃は自らも冒険者であつた国王は目を光らせる。

《うわ、人ばかりだな》

【もう慣れなさい。それより気がついてるわよね？】

《当たり前だろ、こんなに見られちゃ気がつくって……》

リュウトは自分が入った時からずっと自分を見てくる視線に気がついていていた。

（なんで国王が俺の事を見てくるのか、分からないな。とにかくやりづらいな）

しかし、そんな事はおくびにも出さずに中央に向かって歩いていく。相手のほうはまだ来ていないのか姿が見えない。

『さあさあ、今回の試合はどう転ぶか全く分からない。片方は昨日、素手で勝ったDランクの冒険者、リュウトオオオ！！』

リュウトはそれに拳をあげて応える。すると、観客からは『おおおおおー！！』という声が聞こえる。

『それに対するはこの国の第二王女でもあり、「業火姫じつかくさめ」の二つ名を持つ、スカーレット・イスカル・クリスチャンだああああ！！』

そんな司会者の声と共にリュウトの目の前に炎の渦が出来る。観客とリュウトが驚いていると（リュウトは二重の意味で驚いているが）中から紅い髪をポニーテールにした女性が現れた。リュウトよりも背は低いが女性としては高いほうだろう。腰には紅い刀身のロングソードが一振りある。

「やあ、君がリュウトか。あたしはスカーレット。よろしく」

「あ、ああ、よろしく。しかし、皇女様がこんな試合に出てていいのか？」

リュウトの疑問は尤もである。しかし、返ってきた返事は、

「あー、確かにそうかも。でも父　　国王は放任主義だから」

というものだった。彼がそんな彼女の父親　　つまり国王に対し、それでいいのかと思ってしまうのはしょうがないと思えよう。

『両者、準備はいいか？』

司会者の声でふたりとも我に返り、それぞれの得物を抜き構える。スカーレットはリュウトが武器を抜いたのが意外だったのか、首を傾げながら聞いてくる。

「あれ？武器使ったんだ」

「流石にそれ相手に素手だと負けるかもしれないからな」

そう言っただけが顎で示したのは彼女の腰にあったロングソードである。そんな彼に彼女は少し驚いたようにしながらも淡々と返してきた。

「流石はエリサと互角に戦ったことはあるわね。これをすぐに見破れるなんて」

「成る程ね。・・・あんた、エリサと知り合いか。だったらなおさら、気が抜けないな」

「ふふっ、ありがと。あたしは君がエリサと本当に戦えるのか確かめに来たの」

そう言っただけで剣を振ると剣の軌跡を追い掛けるように炎が舞う。

『それでは、注目の第二試合、始めエエエ!!』

司会者の声に強制的に意識が戦いへと切り替わったりユウトは一気に間合いを詰めて右手を縦に一閃。しかし、それは彼女の剣によって防がれ、逆に剣から生み出された炎がリュウトに迫る。それはリュウトの居る場所を囲むように広がり始めている。

「なっ!!」

彼が急いで剣を引いて、その場を離れる。彼は今見た光景に驚きながらも冷静に考えられる可能性を導き出す。

「それは魔剣なのか？」

「クスツ、ご名答。これは魔剣『レヴェンテイル』よ」

彼がそう言うのと彼女は『レヴェンテイル』に炎を纏わせる。それはあたかも炎の剣のように。

魔剣。それは普通の剣では考えられないほどの力を宿している物。魔剣は『火』、『水』、『風』、『氷』、『土』、『雷』、『光』、『闇』のいずれかの属性を必ず宿している。例えばリュウトの持っている黒い刀身の二刀、これも魔剣の一種『闇』に数え上げられる。創った本人には自覚は無いだろうが。

故に各国にとつても、魔剣持ちの存在はそれぞれの国の軍事力を大きく左右できるファクターとして今も求められている。

「はあ、厄介な物持つてるな」

「あら、君のだって魔剣の一種じゃない。しかも闇属性の」  
「.....」

リュウトが黙ったのをみて自分の言った事が凶星だったんだと満円

の笑みを浮かべるスカーレット。しかし、その表情は次の瞬間凍りつく。

「な、なんでなの？それは『闇』の魔剣じゃなかったの？」

困惑したような声を出す彼女に向かってニタリとした笑みを向けるリュウト。

スカーレットが驚くのも無理は無い。なぜなら彼は自分の剣に水を纏わせていたのだから。

「これは不思議な奴でな、全ての属性を纏わせる事が出来るんだ」

「そ、そんな事が！」

「……いいのか？そんな隙だらけで？」

「……！」

リュウトの剣に気を取られていたスカーレットはリュウトが懐まで接近している事に気がつかなかった。慌てて、炎の壁を作り出す。その時にはもうリュウトは壁を避け、魔法の詠唱に入っていた。

「全てを押し流す激流よ、幾重もの玉となり潰せ『ウォーターズプレッド』……！」

彼がスカーレットに剣を向けながらそう言うと二刀から出た幾つもの水球が彼女を襲う。

「嘘ッ！我を囲み、敵を止め！」「フレイムウォール」……！」

咄嗟に炎の壁を厚くするが周りが水蒸気で視界が利かなくなる。気配だけでリュウトの位置を探ると彼は彼女の横に接近していることが分かった。

「……ねー!」

ジュウウウウウ

水蒸気が出て、さらに視界を無くす。しかし、そんな状況も気に掛けないようにふたりの剣は何度も交わる。

「炭になりなさい! 『ボルケーノ』!」

「おわッ、危ッ!」

さすがに苛立ってきたのか彼女は地中から炎を発させる。リュウトはそれに気を取られて姿を見失ってしまった。周りを見渡すが相変わらず水蒸気で視界が利かない状況だ。

「ち、気配まで消されちゃどうしようもないな。『ストーム暴風』!」

顔を顰めながらそう呟き、風によって水蒸気を払う。するとそこには五人のスカートレットがいた。

「おいおい、これのための時間稼ぎか?」

「ええ、その通りよ」

「さあ、」

「君は」

「本物を」

「見破れるのかな?」

リュウトを囲んでいる五人のスカートレット達は順々に言葉を投げかけてくる。

それに対して彼は即答だった。

「当たり前だろ。それとも見破れないとでも思ってるのか？」  
「……………へえ、それじゃあ、見せてもらおう」

五人の彼女はそう言うバラバラの構えをしながら突っ込んでくる。リュウトは分身に攻撃を当てても無意味と知っているが、相手の攻撃は自分に通じるので防ぐしかない状況だ。

しかし、攻撃すればそれは炎の塊となってリュウトに襲いかかる。その代わり炎の分身は消えていく。

いくら水魔法で身体を覆っているとはいえ、徐々に火傷などの傷ができる。

「はあ、はあ、このままじゃ、消耗戦か……………。次で決める！」

「おやおや、意気だけはいいね」

「喰らえ、『シヨット・乱れ』!!」

聞こえてきたスカーレットの言葉にリュウトは少しの間隙が出来た瞬間に風魔法で周りの空気を凝縮し、銃弾の形を造り周囲に無差別に放つことで答える。

もちろん普通の風では火を勢いづかせるだけだ。しかし、凝縮された風の塊は火を勢いづけること無く、分身たちの体のおちこちに穴をあける。少しの間、分身たちは硬直する。だが、そのわずかな時間リュウトは全ての準備を終えていた。

「人形遊びはおわりだ！水塵水刃すうじんすいは!!」  
「なッ!!」

振り抜かれる二刀から放たれる巨大な水刃が次々と炎の分身たちを斬り、消えていく。その様子を見ていたと思われるスカーレットの驚く声がどこから聞こえる。

炎も消え、周りが見渡せるようになる。彼から少し離れたところにスカーレットは立っていた。

無傷であるはずの彼女の顔から余裕が消え、厳しい表情でレヴェンティンを構えている。対してリュウトは両腕にやけどを負い、二刀も満足に振れない状態だ。このまま接近戦を試みても倒されてしまうのは目に見えている。

だからこそ、彼は剣を捨てた。

「？降参のつもり？・・・やっぱり、エリサが戦うほどじゃあな

「誰が降参なんて言った？素手で近接的な攻撃じゃあんたに敵わなそうだしな。魔術で蹴りを付けようや」

「・・・ふん、いいわよ。じゃあ、お互いに最高の魔術を放ちましょう」

彼女はリュウトの提案に軽く頷いて承諾し、剣を鞘に戻す。リュウトは剣を拾う気さえ無いのか、地面に落したままだ。

「・・・どうやら、ふたりは剣による戦いから魔法重視の戦いになったようだ！！さあ、リュウト選手はどんな魔術を放つのか！？そして、スカーレット選手はどこまで本気を出すのか！これは見どころだー！！！」

司会者は会場の様子にそんなコメントをし、観客は滅多に見られない事に大いに沸きたつ。そんな様子を尻目にふたりは魔力を練り、自分たちの最大の威力を持つ魔法を放とうとしていた。

『つかさどるは、水、それは神の時代より万物を押し流し、荒れ狂う激流。全てを流し、我にその光景を見せよ！！』

『つかさどるは、火、それは地獄に存在し、万物を焼き尽

くす地獄の業火。全てを焼き、我にその荒野を見せよ！！』

ふたりが詠唱を始めると多くの観客が席を立って見ようとする。それは一般人だけでなく、王族やSSランカーたちも同じだ。

「『ダイダロス』！！』

「『インフェル・フレイム  
地獄の業火』！！』

『な、なんとということだぁー！！ふたりが発動したのは水と火、それぞれの最上級魔法だー！！！！』

『どれ、障壁を強化しようかの？』

司会者が興奮したように言うのにグランドマスターは試合中の魔法や衝撃から観客たちを守っている障壁を機に掛けたようだ。事実、ふたりの魔力によって障壁はギンギシと嫌な音を微かにたてている。すぐさまグランドマスターによる障壁の強化が行われる。

会場ではリュウトの掲げた手から膨大な量の水流が、スカーレットの背後にある巨大な魔法陣からは圧倒的な熱量を発する紅蓮の炎がそれぞれ放たれる。

そしてその二つはちょうど、ふたりの中間地点で衝突。同時に大量の水蒸気が発生し、先ほどとは比べられないほどの視界が阻められ、熱気が両者に襲いかかる。そんな様子に観客からは悲鳴や歓声が聞こえる。

スカーレットは炎の制御をしながら水蒸気から身を守る魔法を掛ける。

だが、リュウトは双方の魔法がぶつかった瞬間に地面を蹴り、蒸気から身を守ることとせずに一直線に彼女のもとに駆ける。しかも、その間も激流を巧みに操り彼女に自分が移動している事を悟られないようにしている。

普通、移動しながら最上級魔法を操ることは十分に賞賛される事である。故に、手負いの身でそれを操れる技術を持っているのは負け

たとしても名誉だ。現に彼の周りには沸騰した湯並みの温度を持った蒸気がある。それによつて身体は悲鳴をあげてるに違いない。そんな中、彼はそんなものを気にする事もせず、ただひたすら、彼女のもとに走り、決着を決める為に。

「ッー！ぐあッ」

それは熱気にやられたのでは無く、『ダイダロス』の制御が上手く出来なくなつてきたからである。距離が空けばそれだけ制御が厳しくなる。そしてそれはリュウトも例外ではない。もし、制御が出来なくなればカモフラージュは破られ、自分が勝つことはできなくなる。

彼の苦悶の声はそんな感情から出てきたものだ。

だが、マラソンでもいつかゴールが見えるようにいくら広くても目的の場所は存在しているものだ。とうとう、蒸気の中にスカーレットを見つけるとリュウト。彼はさらに加速しつっこむ。

「なッ、いつ間に！」

「チッ」

流星は仮にもSランカーというところか、彼女は直前で気づくと魔法の制御を中断、腰にある魔剣を抜き放つ。同時に観客も気づき、大きな声を上げ始める。

このまま行けば彼女の剣がリュウトに直撃する。しかし、減速する事無く右手を握りしめたまま走る。

そして、スカーレットの剣が当たると思われた瞬間、彼は目の前から消えた。彼女が目を見失った半秒後、腹部に衝撃を受け彼女はその場に崩れ落ちる。

「ぐはッ！」

声が聞こえたかというところにはリュウトが苦しげな表情をしながら右手を治そうとしていた。

あまりの出来ごとに観客も司会者も理解が追いつかなかった。

『おみごとじゃった！この試合、リュウト選手の勝利じゃ！！』

沈黙を破ったのはグランドマスターだった。彼にはリュウトのしたことが全て見えていたので微笑みを顔に浮かべていた。その声を合図にギルドの職員たちが彼らのまわりに集まってきた。スカーレットは担架に乗せられ、リュウトは自力で歩こうとしたが熱気と痛みで歩けなかったので職員に肩を借りながら診療所に連れられて行った。

こうして第二回戦二試合目は幕を下ろしたのである。

## 第二十一話（前書き）

明けましておめでとうございます。

総合PV61,000達成！これからもよろしくお願いします。

## 第二十一話

場所は会場の一角にある診療所。ここには試合中に怪我したりした者が運び込まれる。そんな場所でふたりの人物がベットに寝かされている。ひとりは炎のような髪の毛とどこかの貴族を思わせる美貌を持つ女性で、気絶しているのか、静かな寝息を立てながら寝ている。

「痛ててッ」

一方、そんな呻き声をあげたもうひとりは黒髪に黒目、黒いシャツに黒のズボン、そして両腕に包帯を巻いているのは言わずのがな、リュウトである。近くには彼の一对の剣と黒いロングコートが置かれている小さな棚があるが他には何も無い殺風景な場所である。

（はあ、まさか炎の上位精霊であるイフリートの加護が付いていると思わなかったな……）

リュウトは痛み止めに、と言って渡されたラプチの実を口に含みながら先ほどの試合について反省をする。ちなみにこのラプチの実は火傷や傷が発する熱を分解する 解熱作用があるらしく、火傷の怪我の際はよく用いられているらしい。しかし、一時間に一個の制限つきだが。それを知った時、リュウトは「薬は毒にもなるか……」と漏らしたような、そうでなかったとも。

リュウトがスカーレットを昏倒させた時、彼の右腕には強烈な痛みが走った。それはまるで100 を超えるまで熱せられた焼き鏝やまじりを腕に押し当てられたような痛みだった。

まあ、気絶まではしなかったがそれまでの怪我の事もあり、歩くことは出来なかったのでギルドの職員の手を借りてベットまで運ばれ

てきたという事である。

ギルドのヒーラーの話だと明日までは安静にするようにと言われたので剣を振る事は出来ない。というわけで、今はひたすら回復に努めるしかないのである。

「あー、身体、鈍るなあ」

「そんな事言ってもしょうがないじゃない。あんな無茶したんだから」

「……まあ、そうなんだけどな」

そんな事をボヤいているとルナが実体化して長い銀色の髪を弄りながら不機嫌そうに言ってきた。

こいつも心配してくれているのかな？とリュウトが思っている

「リュウトが怪我するから、おいしい焼き鳥食べれなくなったじゃない!!どうしてくれるの!?!」

ルナの発言に（ああ、結局、食べ物的事ですか）、とリュウトが落ち込んだのは言うまでもない。

「失礼しま〜す」

「し、失礼します」

そんな様子の病室にそろそろと入ってきたのはSSランカーであるエリサとイスカル皇国第三皇女であるアリスのふたりである。ふたりは頭を抱えて落ち込んでいるリュウトとラプチの実を一心不乱に食べているルナの姿を見ると目を白黒させて、扉の所で立ち止まっていた。

「あれ？ふたりとも見舞いに来てくれたの？」

「へっ!？」

「あ、姉上。お目覚めになったのですか」

「………起きたんだ、スカーレット」

リュウトより先に気づいたのはいままで横になっていたスカーレットだ。リュウトとルナは彼女の言葉に気が付いたようでリュウトはポカン、とした顔で入ってきた面子を見ていた。ルナはラプチの実をしゃぶりながらだ……。

そんなふたりを尻目にアリスは彼女の姉に当たるスカーレットのベツトの脇に座る。

「あたしの事を心配して来てくれたの？」

スカーレットは目を輝かせながらそう尋ねた。そんな姉の様子にアリスは顔を俯けているため、表情が見えない。しかし、彼女の手はプルプルと震えていたため、エリサとリュウトは心配しているんだなと思った。

「………姉上？」

「何、アリス？」

スカーレットは妹の尋ねてくる声に優しい口調で応える。彼女は妹の口から自分の身を案じるような発言なくと思っていた。それは他のふたりも思っていた。しかし、

「何で、あんな危ない事をしているのですか!？あなたはいつつも父上や母上が心配しているのに他の国にふらふら、ふらふら。一体、いつ王都に帰ってくるつもりですか!?!?!いい加減に帰ってきてください!?!兄上だって心配してるんですから!?!?!言っておきますけど、これ以上学園に行く以外で冒険者を続けるなら私は姉

上と縁を切ります!!!!!!!!!!!!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女の口からは身を案じるような言葉ではなく、スカーレットが冒険者が続けていることに対する反対の言葉だった。

エリサとリュウトはあまりの事に絶句し、スカーレットに関しては最早、疑問の声もあげることできずに意識がもう一度飛ぶ寸前で口をパクパクしているだけだった。

アリスは言うだけ言うと部屋から飛び出して行ってしまった。飛び出していく時に、目元に光るものがあつたのに気づいたのはルナだけだった。

しばらくの間、沈黙が部屋を包む。その空気を破つたのは新たな訪問者だった。

「え〜っと、失礼だけどうちの姫様知らない？ここに来たと思うんだけど・・・・・・・・」

それはアリスの護衛隊長であり、近衛隊長でもあるラファセルだった。彼は場の雰囲気にもまれてしまったのか最後のほうの言葉は崩れてしまった。

「あー、アリスならさっきこの部屋飛び出しつちまってな・・・・・・・・」

「・・」

「うん。わかった。ありがとう」

「えっ！今のだけで分かるんですか!？」

「あ、うん。だってスカーレット様があんな風になるのは彼女しかないからね」

そう言ってスカーレットのほうを指差すラファセル。その方向を見

るとベットに倒れこんで気絶している彼女の姿が。

「……あいつ、極度のシスコンだったのか」

「前から溺愛ぶりは見てたからね」

「はあ、まったく一体いつになったら我が娘は独り立ちするのやら……」

「はッ!？」

「えっ!？」

急に聞こえてきた声に振りかえって見るとそこには頭を抱えて大きなため息をしているイスカル皇国皇帝、その人がいた。

ラファセルはその姿を視界におさめるや否やすぐに皇族に向ける片膝を立てて頭を下げるという敬礼をする。

「こ、これは陛下!! 此方にお越しになるのであれば、自分に一声かけてくだされば」

「別によい、こうして愛娘の顔も見れた事だしな」

「はっ!」

皇帝はラファセルの方に一瞬視線を投げ、リュウトのほうに顔を向けてきた。国のトップに立つ者が持つ威厳のある視線を向けられたリュウトは体をビクツとさせる。

「ククク、面白い子だな。私の名前はヨハネス・イスカル・クリスチャンだ。見ての通り、この国の皇帝をさせてもらっている。よろしく、リュウト君」

「は、はい、よろしく願います陛下」

リュウトの口から「陛下」と出た瞬間、ヨハネスは顔を面白くなさそうにして大きな手を横に振る。

「いらん、いらん。『陛下』なんて言わんでくれ。所詮は民のおかげで皇位についていられる者の身なのだから。私の事はヨハネスでも何でも好きに呼んでくれ」

「は、はあ」

これが国のトップに立っている人物なのか、と疑いたくなるような態度に戸惑うリュウト。そんな彼に助け船を出したのは今まで跪いて敬礼をしていたラファセル。

「（無駄だよ、リュウト。陛下はこうなると頑固だから）」

「（………苦勞してんだな、お前）」

「（分かってもらって嬉しいよ）」

リュウトは溜め息をついているラファセルに同情と憐みの視線を向ける。

スカレットは自分の父親が来ている事を知って飛び起きて、挨拶をしていた。

「さて、そろそろ私も戻らなくてはいけないのでな。リュウト君、エリサ君、君たちが面白い戦いを魅せてくれることを楽しみにしているよ。おっと、その前にラグを倒さなくてはな」

「ええ、その通りです陛下。リュウト、僕は君に負けるつもりはないよ。もつとも、その前に次の試合を君が勝てればの話しだろうけれどね………」

「………悪いが、俺にも意地つつものがあるからな。相手が誰であろうと勝っただけさ」

ラファセルの言葉に不敵に笑うリュウト。そんな彼らの間に割って入ってくるひとつの声。

「ちょっと、悪いんだけど私の事も忘れないでよね。一応言っておくけど、もしラファセルさんがリュウトに勝ったならあなたが私の対戦相手になってよね！」

「……いいね、最年少でSSランカーになったエリサ・ハーバ―が強いのか、第三皇女の近衛隊長ラファセルが強いのか。面白いな」

そんな意見を出したのはラファセルでもなく、ヨハネスでもなくリュウトだった。

「だが、その提案はいいらない」

「へえ」

「ククク、面白い、面白いな。やっぱり、若いというのは羨ましい」「いや、ヨハネスさんだってそんな年食ってるわけじゃ……」

見た目30代ぐらいの人が言うのだからリュウトから見たらおかしい。

そんなリュウトに気不味そうに声をかけたのはスカーレットだった。

「えっと、お父様は40歳以上なのよ」

「……サバ読みすぎた……！！！！」

「君は私が何歳だと思っていたのかね？」

「ごめんなさい！まだ、30代かと思っていました」

「……」

「まあ、無理もないよね。新人だって間違えるぐらいだし」

その言葉にリュウトは「福音がキターー！！」と心の中で叫んでいた。城の新人兵士が間違えるなら自分は仕方ないだろうと半ば現実逃避気味に思った。



「いらっしやいませ、今日はどのようなご用件でしょうか」  
「ヘルト氏はいらっしやいますか？」  
「旦那さま……ですか？失礼ですがお名前を」  
「リュウト、と言えはお分かりになると思います」  
「そうですか。それではしばらくお待ちください」

従業員は納得したように、頷き奥に引つ込む。

【大丈夫なのかしら？】

《何がだ？》

【あなたが来る事を伝えてないんじゃないかしら？】

《だったら、勝手に探るだけさ》

【最低ね】

《最低で結構。もう情報屋まで雇って情報探つてんだし、今更このぐらいは何でもないだろう》

ルナの批評にさらつと返すリュウト。そこには罪悪感など欠片もないのでむしろ清潔感が出ている。

【あなたが魔王だったら今頃大陸はどうなっていたのかな？】

《さあ？それは神のみぞ知る、というものじゃないのか？》

【神を信じていないあなたが言う？】

《考え方さ》

リュウトとルナがそんな受け答えを繰り返していると従業員が戻ってきた。彼はカウンターからリュウトの傍に来る。

「確認が取れましたので此方にお越しく下さい」

「どこに行くんですか？」

「旦那様から倉庫のほうにご案内するように言われておりますので

付いて来てください」

そう言つて彼は一回表に出て隣の建物の鍵を開け、案内される。リュウトは「おじゃましてまーす」と言いつつ入るとギョツとした。

中には魔道具と思われる杖や箱などが大量に納められていたからだ。

「これ、全部が魔道具なのか？」

「ええ、その通りです。当店が扱っている魔道具には日常生活から冒険者用など多岐に亘っております。例えば毎日の生活の上で欠かせない光を生み出す物や汚水を飲料水にすることができる物がございます」

そう言つて彼が見せてきたのは山に登つていく時に持つていくようなランタンと透明な石だ。

ランタンの中には『発光石』と呼ばれるものが入っており、魔力が溜まった状態で衝撃を加えると約2、3時間は光っている。そして、魔力は空気中から蓄えられるので魔力の無い人間でも使える優れモノだ。

一方、透明な石のほうは汚水などに漬けると汚れだけを吸収する物だ。これは『発光石』とは違い、消耗品である。両方とも魔道具取扱店で無くても売っているため、比較的手に入れやすい。

「これ以外にも魔術師用の物や剣士用の物など色々ございます」

「しばらく見ていてもいいですか？」

「ええ、どうぞ。私は店のほうにおりますので見終わったらお声を掛けください」

「分かりました」

最後に彼はリュウトに倉庫の鍵を渡して店に戻っていった。

「そんじゃあ、搜索開始といきますか。ルナ、お前にも手伝ってもらおう」

「りょーかい」

リュウトは彼が店に戻る気配を確認するとルナにも協力してもらって探知魔法で隠し扉や隠し棚を探し始めた。

「怪しいものは無いわね」

「やっぱり、自宅のほうに隠してるのか？」

「むしろそっちの可能性のほうが高いと思うわ」

あれから時間をかけて探したのだが途中で探知魔法に対探知魔法用魔道具が反応するなど、ハプニングがあり、思うようにはいかなかった。

結局、あまり倉庫にいてもこちらのほうが怪しまれるだけなので切り上げることにしたのだ。

「うーん、そうなるとギルドか騎士団による家宅搜索ぐらいしか対応策が思いつかないな……まあ、うだうだ悩んでも仕方ないか。どんな物があるのか、分かっただけでも僥倖だし」

「その点については同感よ。どんな物なのか解析できたしね」

アナライズ

ルナはリュウトの後半の言葉に同意を示した。ルナは専ら、ここにある魔道具がどんな効果を及ぼすのか調べていた。その甲斐あつてほとんどの魔道具の仕組みや効果が分かったので、もし倉庫内にある物が使われたとしても対応が出来るようになっていたのだ。外に出ると外はもう夕暮れになっていた。

「如何でしたか？もし、お気に召した物がありませんでしたら……」  
「ああ、大丈夫です。少なくとも今のところは間にあってるので  
ところで、最近新しく入った物があつたりしますか？」

「ええ、確かに二日前に新しい物が旦那様のご自宅に運び込まれま  
したが……」

「？此方ではなく、ヘルト氏のご自宅に？」

鍵を渡された男性従業員の言った言葉に気になる点を見つけたリユ  
ウトは疑問顔を作りながら聞いてみた。

すると、彼は何の迷いもせずに答えを返してきた。

「先代様の頃より一度ご自宅に運ばれた上でこの店に置かれること  
が通例となつたそうですよ」

（もし、その運び込まれた物の中に強力な魔道具があるなら……  
）

「そうですか。教えてくださつてありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそこれからお願いします」

ひとまず、宿に帰つて今日分かつた事を纏めることにしてヘルトが  
経営している店を後にした。

【彼は何も企んでいないんじゃないかしら】

帰り道、ルナが唐突にそんな事を言ってきた。

《……俺もその可能性は考えてる。だが、未だに可能性の域を出ないんだよ》

【じゃあ、探るのを続けるの?】

《武闘大会が終わるまではな》

【……そう。ところで人がいないと思わない?】

(ん? そう言われればやけに人の気配が少ないと思うような……)

リュウトはルナに指摘され、周りの異変に気づく。それもその筈、今彼らが通っている道は夕暮れになっても人通りが多い。しかし、今は彼らしか歩いている者が気配すらないのである。

リュウトはこの状態は危険だ、と直感で悟ると宿まで走ろうとしたがすぐに足を止めた。なぜなら、そこには黒いローブを被った数人、否、最低10人はいたからだ。

彼らは全員が全員、フードを深く被っており顔は見えない。

(チツ、囲まれたな)

気がつけば背後にも数人まわっており、リュウトは心の中で悪態をつく。

リュウトは昨日の一戦の怪我が原因で今日は帯剣を許されなかったので二刀とも宿に置いてきている。武器と言えばロングコートの中にいつも忍ばせてある、刀背に鋸刃セレーションがあるサバイバルナイフ、投げナイフが数十本だけである。

「おとなしくすれば悪いようにはしない」

彼がどうするか悩んでいると無感情の声が掛けられる。

「ふん、それはおとなしく殺されろってことじゃないのか。悪いが俺はごめんだね」

「……ならば、覚悟は良いな？」

その声を皮切りに背後から3人ほど襲いかかってきた。

それを上に逃げることでかわし、上から魔法を叩きつける。3人の内、2人は頭を地面に打ったが1人はすぐさま後ろに引くことでこれをかわした。

リュウトが魔法を打っている隙に左右の建物を足場に更に5人が襲いかかってきた。リュウトは自分のまわりに一瞬だけ強風を起こし、襲撃者達の態勢崩す。

彼らはリュウトよりも着地を優先し、来るべき衝撃に備えた。しかし、彼らよりも早く地面に着いていたリュウトは地面との反動を利用し、落ちてくる彼らの1人に突っ込みながら顎を砕く。彼はその身体を踏み台に次々と行動不能にしていく。

「……魔術の準備をしておけ」

仲間がやられていくの見ていたリーダー格の男は近くにいた者に指示を出す。その者たちはそれに黙って頷き、準備を始める。

彼の手は冷や汗で焦っていることを嫌でも自覚していた。そして、恐れを感じていた。

彼が所属している組織の情報ではリュウトは昨日の試合で深手を負っている、ハズだった。にも拘らず、目の前では既に7人もの手練が地に伏せている。

（これでは、話が違うではないか！）

思わずそう思ってしまう。だからこそ、街の被害を無視した魔術の準備をさせている。

「くっ、邪魔だ」  
「・・・・・・・・」

リュウトは目の前にいる黒尽くめに悪態を吐きながらナイフで肩を狙って突く。相手は黙ったまま、そのナイフをいなす。

奥では何らかの魔術の準備が進められているのが分かっているからこそ、彼も焦っていた。

両腕は火傷のせいで皮膚が引きつり、上手く動かせない。さらに手元にはサバイバルナイフ一本だ。

魔法を使うにしてもちよつとした隙でやられてしまう。それはルナも同じだ。ルナが魔法を使うとしてもそれはリュウトという媒体を通してのわけであって当然、彼の体に何らかの負担は掛かる。故に彼女は下手に手が出せない。

この膠着状態を打破するには何か決定打が欲しいリュウト。そんな時、同時に2つのことが起きた。

一つはリュウトの相手が急に身を反転させると後ろに下がって行ったこと。そして、もう一つは奥にいた者たちが一斉に懐から短剣を出し、リュウトに対して背を向け、街の暗がりに対して警戒し出したこと。

リュウトは突然のことにキョトンとしたが、黒装束たちは相手が誰だかわかっているのか、微かだが動揺が見受けられる。

「な、なぜだ！？結界は張っておいたはずだがー」

「それならバれない・・・・・・・・とでも？」

俺からすれば・・・・・・・・お粗末すぎて・・・・・・・・お笑いだな・・・・・・・・」

暗がりから現れたのは襲撃者に負けないぐらい頭からつま先に至るまで全身真っ黒の格好をしている男だった。口にもマスクをしており、目元しか分からない。その瞳は銀色をしており、着ている物の色との組み合わせは不思議な雰囲気醸し出していた。

喋り方は何度も区切りをする独特な物だった。そして、彼からは気配が全くと言っていいほど、感じられなかった。それは不気味でもあるがリュウトは敵意を感じなかった為、それほど気にしていない。

《あれは一体誰なんだ？敵ではないのはわかるんだが・・・》

【さあ？私の探査魔法にひっかからなかったわよ。ま、今のうちに両腕の応急処置しちやえば】

《そうだな。咄嗟の時に動けるようにしとこう》

彼らの注意が逸れている隙にリュウトは両腕の痛みを和らげている。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

一方、男と襲撃者たちの緊張は限界近くまで高まっていた。数では圧倒的に優位なハズの襲撃者たち。しかし、両者の間には絶対的な壁が存在していた。

襲撃者たちは全員が全員、手だけでなく背にも冷や汗を掻いていた。それに比べて男は何の構えもせず、ただそこに飄々と立っているのみ。

「・・・・・・・・なんだ・・・こないのか？・・・ならば・・・此方から・・・行かせて・・・貰うぞ」

彼は焦れた様にそう言う。と一歩、前に出る。それな合わせたかのように彼らは下がる。

また、一歩前が出る。また、下がる。

明らかに場の流れは男に支配されていた。

「くっ！絶対に通すな！！」  
「・・・遅い・・・」

リーダー格の男の耳にボソツと後ろからそんな声が聴こえてきた。気が付けば、周りにいた部下たちはひとり、またひとりと次々に地面に挨拶をしていく。

まさか、と思いながら後ろに振り向こうとするが、身体が言うことを聞かない。そればかりか、だんだん傾いていくのを感じる。

「・・・『ファントム幻影』」

目の前が真っ暗になる前に男が口にした言葉はそれだけだった。

「すげえな」

【・・・確かに】

それは目の前で起こったことに対する一言。そこには憧れと賞賛が籠っていた。

リュウトは今見ていた事をもう一度頭の中で再生する。

男は何もないかのようにゆっくりと歩く。擦れ違った者たちがゆっくりと倒れていく。

男が何をしたのかリュウトには分からなかった。だが、男が黒尽くめの木の間に潜り抜けている間中、気配が常時、無かった事には気が付いた。

「有難うございます。助けて頂いて」

「・・・気にするな・・・大会中の・・・安全対策は・・・SSランカーの・・・義務だからな」

「はあ」

リュウトが礼を言うと彼は首を横に振って否定した。  
そんな彼に間の抜けた声をあげるリュウト。

「リュウト……だったな。……俺の……名前は……ゲーツ。  
……二つ名は……『ファントム幻影』……だ」

ゲーツ、二つ名は『ファントム幻影』。SSランカーの一角であるゲーツは気配を全く相手に感じさせずに生活を送っている。そんな彼は他のランカーとは違った経緯でSSランカーになっている。しかし、その話はまたどこか別の機会に触れるとしよう。

閑話休題。

「よろしくお願いします、ゲーツさん」  
「ああ……よろしく」

その後、ゲーツは襲撃者たちを転移魔法で然るべき所に送り、リュウトは宿に戻り今日の搜索の結果をまとめながら魔術に関する本を読み、明日の試合に向けて対策を練って夜は更けていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4665x/>

---

漆黒

2012年1月2日05時16分発行